昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可　昭和卅八年十二月二日発行卅八年十二月号　（毎月一回一日発行）　創刊大正十三年通巻四三九号

# 川柳雑誌

Pensoj flugas trans la land - limon

THE SENRYU ZASSHI

No. 439

十二月号

川柳雑誌社主催

# 忘年川柳大会

**日時** 十二月六日（金）午後五時

**会場** 自安寺（〔211〕一四七八番）
大阪市南区千日前電停スグ北側

司会　西田柳宏子

挨拶　中島生々庵

**兼題**「質素」（二句）　麻生路郎選
「ニュース」（三句）　若本多久志選
「空巣」（二句）　松江梅里選
「チップ」（二句）　正本水客選

**席題**　二題（当日発表）

**句評**　清水白柳

**支部対抗戦**　各支部選手

**雪月花句戦**　出席者全員

**呈賞**　☆各題三才☆　各題天位から路郎選により不朽洞賞　支部対抗戦優勝者・準優勝者及び雪月花戦一位の組に川雑賞

**余興**　出席者有志

**会費**　百五十円
★投句だけの方は郵券三十円同封
（〆切十二月三日）
★忘年懇親宴―閉会後・同会場で会費五百円

句の総決算の日です。
一人のこらずご出席くださいませ。

**1月本社句会予告**
〝兼題〟
天気晴朗
振出し
輝く
あだ名


大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地
川柳雑誌社句会部
電・大阪（〇〇）六〇八一



えらばれ
みがきぬかれた　灘の酒
超特撰　日本盛

超特撰（化粧ケース入）一、八リットル詰・一、二〇〇円

清酒
日本盛
ニホンサカリ
灘　西宮酒造　醸

# 悼ケネディ大統領

麻生路郎

瓦礫も莫迦に出来ない
光をさえぎる

一瞬 黒い霧が
地球上の眼を奪った

冷戦の分水嶺に立った
若々しい姿

——一九六三・一一・二六

## 川柳雑誌十二月号目次


題字…麻生路郎・表紙…野尻弘

悼ケネディ大統領……麻生路郎…(3)
窓口談義……麻生路郎…(24)
句集「凡人」を読んで……北川春巣…(28)
頭に残る川柳句集……東野大八…(18)
新進作家おおいに語る……橘高薫風子 林夢虹…(30)
川傍柳初篇研究（九）……丸十府・岡田甫 川端柳風・高須啞三味・前田喜代人 岡崎重義・清博美・藤井和雄…(12)
福岡阿彌三氏の横顔……山村祐…(16)
大阪文化祭 第十五回川柳大会……(34)

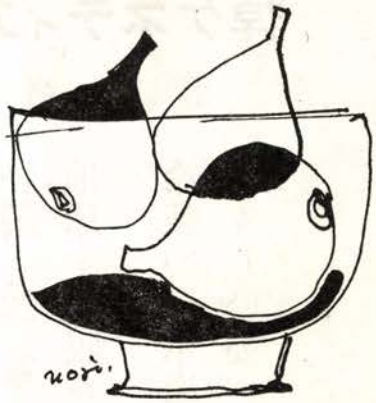
私は斯の如く 自句を自釈した……水客・好郎・愛二・甲吉・阿茶 古方・草右・野迷路・生々庵 善由・清生・きさ子・夢虹…(26)

★大万川柳「ケタ違い」発表…(41)
名句と難句……麻生路郎…(24)
柳志寸言……本多柳志…(20)
明治・大正柳誌順礼……奥津啓一郎…(40)
照手姫……冨士野鞍馬…(33)

★

川柳塔……麻生路郎選…(6)
同舟近詠……諸家…(11)
近作柳樽……麻生路郎 北川春巣選…(20)
金泥集……麻生葭乃選…(29)
各地柳壇……(42)
★柳界展望……(38)
★飛・燕・往・来……(40)
「ウィンク」……土井文蝶選
一路集 「新鮮」……長野井蛙選…(36)
「和服」……高橋操子選…(37)
★柳樽室……路郎生…(46)

★現代柳人録……(19)



# 窓口談義

麻生路郎

## 人類の左派と右派は何処まで続くか

忙しいので、枕許へ新聞は積み重ねたままになっている。ラジオも二、三日聞くヒマがなかったが、せめてニュースだけはと、ラジオのスイッチをいれた途端に、ケネディ暗殺という声がする。一瞬息をのみ、耳をそば立てたが、まぎれもなく米大統領ケネディ氏がオズワルドという青年のためにダレスの街で白昼暗殺されたのであった。

ありうべからざることであり、ありうべきことでもあった。横山泰三氏の社会戯評に、富士山の上から「犯人のバカッ」と一喝している画が描かれてあったが、これは人間として自然に出る言葉で、オズワルドに対する第一声はこれより外にはあるまい。

朝日新聞の十一月二十六日の夕刊には今日の問題として、「北京の反応」という記事が掲載されている。一寸拝借すると、

「ケネディ暗殺事件について、北京の各紙は簡単な報道をのせただけで、各国の反響はおろか、北京政府首脳がこれをいたむような言葉も、全然紙面に見られなかったという。同じ共産国でもソ連のフルシチョフ首相が、ケネディ氏の死を世界平和のための大きな打撃だとして米国に弔電を送り、さらにモスクワのアメリカ大使館におもむいて弔意を表したのとくらべ、余りの違いというほかはない。

もっとも北京政府は、さる十八日発表したソ連批判論文「戦争と平和の二つの路線」の中でも、「アメリカ帝国主義」は口に平和をとなえながら、米国社会主義陣営の間にある中間地帯を侵略するという「世界最大のペテン」を計画しており、その計画を実行する「戦略」の頂点にあるのがケネディ大統領だと断定していた。しかも、「米帝国主義は、フルシチョフがかれらに向かって聖書を読んだり讃美歌をうたったりしたからといって、美しい天使に変わるようなことはなく、フルシチョフがかれらに向かって線香をあげ、ひざまずいて拝んだからといって、慈悲深い菩薩に変わるようなことはない」と口をきわめてフルシチョフ首相を非難している。

そうした論理からするならば、ケネディの死は何ら同情に値しないのかも知れぬ。また北京の新華社電は、ジョンソン新大統領はこれまでケネディの「反動政策」を支持し、台湾や南ベトナムをはじめ東南アジアを訪れ「反共戦略」を強化した。と早くも攻撃の声を放っている。

（以下略）

ケネディが暗殺されたのに非常なショックを感じた私は、右の「北京の反応」を読んで、人類は到底救うことの出来ない動物に過ぎないことを認識したのであった。

私は曾つて、「**人類は悲しからずや左派と右派**」と詠み、世の中のあらゆる左派と右派の解消のされることをのぞみ、自分の周辺からでもその左派と右派の融和を計ってゆけば、やがては自分の手の届く範囲だけでも平和な世界が実現するのではなかろうかという理想主義を打ち立てて来たが、ケネディの暗殺とこれに対する北京政府首脳者によって脆くも、こっぱみじんに打ちくだかれたのであった。私は元々大の人間嫌いだったが、それだけに、大の人間好きでもあった。この対蹠的な言葉のムジュンが誤解を招き易いので、それだけに私は人間嫌いを人間好きに切り換えるために、私の川柳を通して努力して来たが、今度という今度は人間にあいそがつきた。人間が嫌いになった。人間というすべての人間が嫌いになった。私の知己友人よ、誤解して呉

れるな。人間が嫌いになったのは、私自身をふくめての話であるから。

私は今後、人間を一羽の雀よりも愛さないであろう。従って私自身も人から愛されようなどとは毛頭のぞまない。ケネディの死は私にとって大きなショックには違いないが、それよりも、ケネディ氏の死に一片の同情をすら持たない北京政府の非人情さが、私の人生観をスッカリ変えさせてしまったのである。人間が人間を救うことは不可能である。動めく動物は自分の欲望を求めて動く以外に何もないことを知った。私は夜半静かに、ヨハネ黙示録を読みかえして見た。世の終りを予言しているから——。

**寝転ろべば疊一帖ふさぐのみ**

今はただこの旧作の中に寂びしく生きようとする私であることを告白しておく。

## 婚後五十年解消説

私等夫妻は大正二年に恋愛によって結ばれたので来春四月には五十年を迎える。世にいうゴールデンウエディングだが、私はそれを特別に芽出度いとも思っていない。むしろこの二人三脚が、よくも破綻も来たさないで今日まで続いたものだと、驚きもし、呆れもしているのである。

私は自分のしようとすることしかしないし、彼の女も又したいことしかしない性質なのに、こうも続いたということは珍らしいといえばいえないこともない。

この半世紀の間に、世の中は素晴らしい速力で回転して行った。その変転し変転する渦巻の中に溺れもせずによくも生きて来たものだと思う。

そこで私は、池田首相が、自分の政治力の是非を民意に問うために、衆議院を解散したように、私等夫妻も婚後五十年がお互いに良かったか、どうかを妻の忌憚のない意見を訊くために一たん解消して見たらと考えている。

若し解消するとしたらすべての所有物は一切二分するということを前提とする。それは評価額によってもいいし各自の必要さによってでもいい。

そこで、現在のまま存続した方がいいと意見が一致した場合には、第二人生への一歩を踏み出すための新婚旅行からはじめることにしたいと思う。よしや肉体は若さを取り戻せなくても、精神力にカツが這入るだけでも有意義ではないかと思う。私は昔から何事をするにも情力を怖れ、全身全力主義でやって来たし、これからもそうありたいと願っているからである。

むしろ、この際、解消して、僅かな余生をお互いにホントの自由に生き抜きたいというのであれば、それもいいのではないかと思う。こうした夫妻の世話を福祉協会あたりが、うまく面倒を見て呉れれば更にいいと思うが、そんなことは社会党でも考えては呉れまい。

この外、別居その他の方式もあろう。こんな話をある若い女性に話したら、「外にいい人があるんじゃありませんか」といった。この言葉は一応世間的な人の言葉として受けとることが出来るが、私の場合、婚後五十年での解消説はそんな常識的なものとは違う。考えても見給え、同年輩の女性を求めたところで、五十歩百歩の女性しか得られないのではないか。仮に十代の女性を求めようとすれば、向うから逃げ出すにきまっている。これは彼の女の場合でも同じではなかろうか。この話はそんな浮っついた話ではないのだ。晩年をいかに生きるかという人生の大問題を提出しているのだ。

私達夫妻には九人のこどもたちがあったが（内四人は遠い昔に死亡）、今はいずれも巣立ちして自分等の生活をエンジョイしているので妻と私とは自由に余生の企画を立てられる立場にいるのである。世の人の多くは老後により大きな家を建てることに希望をつないでいるようであるが、私達夫妻はそうした物質欲には至って淡いので、世間の人達から見れば世にもバカらしいと思われることを真剣に考えているのである。

ここへ、私の旧作一句を記しておく。

**幸福は金庫の中になかりけり**

## ★校正机で

一九六三年の歳末号をここに、刊行し得たよろこびは大きい。

大阪のような一にも金二にも金の ド真ン中で非営利的なこんな仕事が何処まで伸びるか。そこに私の興味としぶとさがある。

（路）

# 麻生路郎選

大阪市　市場没食子

警官も一ぺんストをやりたかろ
大まかな答に子供承知せず

豊中市　若本多久志

余命表見せて保険屋よく喋べり
万一の時とは俺の死ぬ時か
タイピスト女史と呼ばれてとうが立ち
月給日風邪気味なので早よ帰り

大阪市　正本水客

妻手術のため入院（三句）

摘出の卵巣夫として対決
点滴注射僕も一緒に動かない
退院に大安の日を選る笑い

高槻市　丸尾潮花

ガス風呂の湯気鉄筋の味気なく
ひまわりのようにホステス向きをかえ
燃えて散るものに淋しい曼珠沙華

大阪府　西　いわを

秋祭り小豆の色と餅の味
フルートの音色に鶯うっとりし
フィルムをカットしたよな物忘れ

大阪市　北川春巣

名神高速道路ドライブへ（三句）

ハイウエー空気の味を先ずほめて
運ちゃんのほかはキョロキョロしててよし
追いこして行った車のエンコ見る

ハワイ　羽佐間柳葉

世渡りの上手俺がを捨てるなり
先輩の名で停年を送り出し

堺市　吉田圭井堂

辞めたいが勝手に替り無いときめ
墨すって書くのではないやいとの日

防府市　長野井蛙

義父長寿バトンは養子を通り抜け
籠を出た自由だけでは生きられず

岡山県　直原七面山

四十五もう夫へは化粧せず
おしどり夫婦装う芝居にもう疲れ
口ほどにないパパさんの英会話
独酌の耳に鈴虫轡虫

鳥取市　河村日満

表彰をされてる方に髭があり
社員への黙祷もあり祝賀式

豊中市　足立春雄

スポンサーがいてズバリと云えぬ講演会

倉敷市　木村千容

慎太郎いいたいことをズバリいい
いたいとこつかれ協会むきになり
八百長が美談となった過去もあり

倉敷市　田垣方大

タクシーに移り香があるなやましさ
上席へつかつかつかと元官吏
あくびして叩き出された十二月

加賀市　野村味平

ブローカーにブローカーがついて分譲地
もしかしたらこれが恋かと胸を抱き

大阪市　木村水洞

解散へ派手にばらまく空手形
同じ説名士が言えば通るなり
肩書がないから友情まだつづき
休んでてもはいる俸給羨やまれ

米子市　小西雄々

宿題のある子も一緒にテレビを見
一等車ゴルフの話へいやになり

大阪市　山川阿茶

ノロノロの市電で今日は京の人
待ち呆うけポケツの金が減らずすみ
義理欠いて美辞も麗句も用なさず

大阪市　金井文秋

おべんちゃら好きで世話やきやめられず
全集の解約をする金詰り
中年のどうにか食えて夢を捨て

加賀市　那谷光郎

質屋出てチト街並の明る過ぎ
男ぎらいやっぱりルージュも眉も曳き
卦に頼り果報寝て待つ不精髯
儲け話聞いて夜なべがいやになり

下関市　桜川不水

ウロコ雲デイトはとうに丘を越し
すき焼への抵抗かサンマ焼きたてる

岡山市　浜田久米雄

またしても句集の話して別れ
勘定が合わぬ千円札が消え

出雲市　尼　緑之助

さっそうと和服四五人秋を行く
紙幣束をしばしみとれていたりけり

機関車試乗

怪獣の呼吸で登り坂を行き

大阪市　水谷竹荘

名月を守衛も鍵たば下げて見る
母の見得無理にピアノを習わせる
サンドイッチマン雲の行方を見て休み

柳井市　弘津柳慶

いつのまにか婦唱夫随になっていた
先祖は大事にしなはれと占者
宿酔つくづく年を感じたり

鳥取市　杉谷湖山

ペンペン草生やしたままで貸すでなく
友情に応えて足を洗って来

京都市　大鶴喜由

くすぐりに来た娘の気持有難し
貸浴衣何ぞおもろいとこないか
わが恋は下弦にも似て細り行く

尼崎市　小林文月

週刊誌折らずにはいる手提げ買い

会社の松茸狩（四句）

宴会の揃わぬ時を碁でうずめ
団体で来て孫の家素通りし
遊覧の宿のホールのポロピアノ
BGも注がれしコップ辞さぬなり

東京都　山根白星

鉛筆を耳に課長の次の次
蒼白き少女鉛筆研ぎすます
定連の早目に素顔のままで酌ぎ
余生などしばし思わず昼の風呂
人形師無気味な夜の私生活
ステッキで押えて右翼ビラを読み
死火山の如く名人ひとり住む

奈良県　飯降白香

善いことをするにもやはり度胸いり
告別式をすませた顔でデイトして
禅寺は寂として唯水の音

奈良県　西辻竹青

秋芳洞地球は古いなと思い
旧友を訪えば八ひげ落してた

呉市　林野甦光

理由なき恐怖名士の門が憂し
ボリュームが素晴しいとか人が云う

岡山市　服部十九平

寄贈者の名が目障りな大時計
交叉点犬も信号待ちに伍し

西宮市　若林草右

還暦の妻へガス風呂湯沸器
白骨が尾根で抱かれる親不孝
お彼岸で墓の値段もきいておく

岡山県　田村藤波

反抗をやんわり包んだ母の愛
裏口と裏口皿が往き来して

児島市　本田恵二朗

名月へどうぞどうぞと開け放ち

京都市　松川杜的

トンネル一つ抜けてからの秋の色
コスモスの印象が残る通過駅
ローカル線脚絆で歩いた路があり

実印に小さき我家にある歴史

鳥取市　森本法泉子

退院がまだ臥ているに次のが来
退院のベッドへ今日の傘を干し
看板は右書き京の老舗にて

堺市　高崎雄声

原子の世町は笑顔を忘れてる
生存競争自動車続くよ続く

岡山県　永松東岸

未亡人の一心立派な墓を立て
誘拐をされた子何処夕焼ける
ちっぽけな会社に課長係長

倉敷市　野田素身郎

電化して絵にある汽車が見せられず
運転手の欠伸へ乗客ギクッとし
役人の出張温泉地を選び

芦屋市　丸川初甫

納棺の長旅煙草も入れてやり
負けん気の長男百姓しておれず
宿命の家つき娘恋を捨て

小平市　石居高志

秋の宵柿が風情を添えて暮れ

湯河原温泉にて（二句）

芸妓まだ若しリボンの似合う顔
芸も売り身も売り妓着るという

大阪府　早川清生

ブルドッグの顔してブルドッグが生れ

名月

萩すすき買った夜妻の些事を聞く
トンネルを子と数えてる都落ち
過去許すかたち実家へ呼びにゆく

大阪市　西出一栄

御先祖を思い出せよと曼珠沙華
童心に返えるざくろがはぜており

堺市　辻圭水

二人だという気安さがすり盗られ
労基法無視する程に名が売れる

大阪市　橘高薫風子

めし時の時計の針の親しさよ
警棒に髭の巡査はなくなりぬ
十二月三十一日も傍観者

下関市　中村九呂平

そう思うから竹藪がひどく揺れ
妻はまだゆれてるようだと旅装解く

今日もまた飯場炭坑節で呑み
大阪市　桝　本　蕗　児

石庭を足投げ出して見る娘
鳥取県　田　中　蛙　眠　子

唐津市で
雨の海見おろす私も化石のよう

琵琶湖で
俳聖は何と読むだろ今日の月
叙情とは湖畔の芒が鳴る如し

お茶漬けをさらり京都の夜清し
名古屋市　野　田　一　念

勲一等やるから池田辞めてんか
さり気なく男の気持にそっとふれ

パパの眼ははしたないねとつねられる
神戸市　仲　どんたく

倍増は支出の方かい池田さん
何気なく殺し何気なく自首して出
平田市　久　家　代仕　男

新調を着て不似合なドヤに住み
出雲市　原　独　仙

休日に日曜大工暮れ疾し
癖のある字で親父から意見来る

西宮市　野　呂　鵜　汀

二寸ほど開けて月見をして居たり
繁昌が算盤玉の艶にあり
新潟県　高　野　む　じ　な

新婚旅行子は三人と決めて来る
コマーシャルばかり見たがる子に困り
同級がもうガンになる年になり
大阪市　魚　住　満　潮

続西成界わい
恋愛結婚かつぎ屋の頃結ばれし
日本刀いまはやくざの腰にあり
残額十円子の名の貯金までおろし
千円札天の与えか落ちている
利子運び運び裾模様を流し
愛媛県　村　上　旭　童

がめつさを残んの色香につつんだり
昨日まで釣れたそうなと帰って来
アーケードやっぱり秋の風が吹き
神戸市　傍　島　静　馬

見ていると瓦たやすく葺けていき
小児科医こどものこわがる髭おとす
竹藪がきれて京都の塔が見え

ホステスと云わぬが女給に不満らし
笠岡市　木　山　遠　二

作句でもするさと笑い入院す
ツンとした日もある患者同志かな
妻までが癌ではないと嘘を云う
火の粉払わねばならず老の大手術
大阪市　中　谷　ハ　ナ　子

彼岸花咲かない程に団地増え
大阪市　平　沢　保　美

筋だけは通る社則に縛られる
二十三回忌オツムも仏に似
人生は淋しからずや寺へ寄附
布施市　森　下　愛　論

頼母しく育って父のお古着る
欠伸してのびをして金のない証拠
小児(こども)の隅にまだあるダッコチャン
大阪市　河　井　庸　佑

すしづめを語る無惨な事故現場
特売の靴片いっぽうが見当らず
大阪府　谷　沢　好　祐

朕惟うにの頭が参観してあきれ
赤い毛を連れた男の顔を見る

懐しきかな少年時代めしほうばった
橋新らしく野分しげき県境

堺市　高津徹也

いま死ねば貰える金をはじいて見
ミンク着て特売場はふり向かず
長寿賞神経痛の手でもらい

愛媛県　槇紫光

ノイローゼまでアメリカの真似をする
恋愛至上家裁も遂にもて余し
虹の色ほど美しく女群来る
わびしさは親子も金をやりとりし

青森市　工藤甲吉

初孫「伸」初誕生を迎う
負けん気を早くも見せる男の子

豊中市　林夢虹

裏切った人の心のわかる秋
荷風も英治もやっぱり勲章欲しかった
握手してさよなら泣かないための演技です
空と水汚たのうしてて文化都市

大阪市　今西生蕾

動物は賢明人間ごっこせず
真犯人やあいがむなしくこだまする

呑むよりは功徳と寄附をねだられる

京都市　室井八九寸

待ちし朝刊に少年の体温
大公孫樹ここ本山という構え

岡山県　横山一声

贅沢な暮しして居て社は赤字
アルバイトもうけん先に買う予算

小松市　関戸宗太郎

アルサロが昼の勤めはとうにやめ
ぬけぬけと汚職議員が祝辞読み

美祢市　安平次弘道

火事騒ぎ立てぬ患者も逃げていた
女文字の封書呑み屋のつけだった
草野球ガラスを割ったホームラン
世渡りはむつかし負ける碁石も打ち
サングラススター気取りのドサ廻り

宇部市　平田実男

バスガールもここから揺れだす股を張り
けちんぼへネオンサインがきれい過ぎ
雰囲気が男嫌いをしびれさせ

諫早市　川岡霊眼子

地団駄を踏んでも天は応えざる
密航の夢送還のドラに消え
けちんぼは智恵かすこともようかさず
良妻になれず賢母で手内職
ああなぜに月給やる驅に産れざる
働きの父より遊ぶ母をすき

貝塚市　杉本一鶴

宇宙は自若いかに科学者あばれよと
キリストを話せば鼻であしらわれ
手術後の女患スタイル気にしてる

南ベトナム紛争

武力も愚ガソリン浴びるも愚かなり

富田林市　浅川八郎

女かなし愛児を忘れて特売場
母さんがお見合するのかと思い

岸和田市　内藤きさ子

颱風が外れてかき船灯がはいり
日曜大工にあらずうなぎをひらく釘
祝開店裏はまだまだかんな屑
涙ぐむくせに強気がなおらない
シャッターの方もあぶない岩に立ち

青森県　木村涼人

妻にだけ馬鹿正直を認められ

君ィ君ィとチョッキに手を入れて
　　芦屋市　唐崎専翁

料亭で新国策を早耳し
妾宅で内閣改造する談し
学生の殺人どこで習うてる
酒のめぬ律儀らしさが悲哀なり
　　倉吉市　奥谷弘朗

お世辞一つ云えぬ夫をはがゆがり
月だけが味方というも淋しすぎ
　　兵庫県　遠山可住

借金の車も混じる交叉点
何人もキッスをさせてまだ嫁けず
脱皮したよにシームレス脱ぎすてる
　　兵庫県　河原みのる

火つけは面白し灸でさえ
罪哀しアナウンサー如きに呼び捨てられ
選挙戦負けても首は取られまい
　　姫路市　隠岐不酔

借る時は返すつもりであった傘
晩だけを時間厳守の勤め人
　　大阪市　田中敏行

豊作の松茸一切れある夕餉
　　鳥取県　清水一保

大山にて
立並ぶ旅館は山に養なわれ
　　出雲市　中川晃男

大輪の菊に我が家を占められる
肉体は熟し精神まだ蕾
外人へ作り笑いの背を伸ばし
　　松江市　柳楽鶴丸

クコブーム米寿の祖母ものみはじめ
ラーメン屋旅でラーメン食いくらべ
　　京都市　都倉求女

車中の眼集めているを知る二才
せめてもの抵抗落葉は淵で廻い
顔が利くとこが見せたい三次会
　　兵庫県　大江秋月

停年と言うに月賦がつきまとい
昼はビル夜は二階の佗住居
見るだけの客にも店主愛想よし
人間のガラクタも詰め終電車

## 詠　近　舟　同

変り者底気味悪いほど静か
変人が古ごよみ的役に立ち
変り者天を相手にするつもり
　　今治市　長野文庫

ウインクへ酔うていたのが仇となり
教養が邪魔ウインクへ目を反らす
ウインクを憎からぬ目で受けて立つ
世をすねているのかウィンクへ乗らず
人事異動適材適所主義と逃げ
クレオン画お日さま二つ三つ描き
その先はもう黙っとく平社員
　　大洲市　米沢暁明

雲だけをうつすが如き池の淵
氷枕こうろぎのなく方へ首を向け
　　大阪市　橋本緑雨

ラッシュアワーも知らずのどかな赤字線
赤字線どこか政治の匂いする
　　和歌山市　秋月宏方

修身の時間がないを嘆く父
負ける事が勝で世間がやっと知れ
焦げ具合満点玉子巻の色
叱ってくれた心の裏がやっと知れ
　　名古屋市　長谷川鮮山

岡田　甫氏

# 川傍柳初篇研究（九）

丸十府　高須啞三味
岡田　甫　前田喜代人
○　岡崎重義
川端柳風　清博美
藤井和雄

78　**景物がいゝのでへんな点を取**　米子

**前田**＝「景物」は賞品のこと。賞品がよいので作品を出したが。自分の意にそわない点をとった。入選したものの、おもはゆい感じであろう様子が「へんな」でよく出ている。

**岡崎**＝「へんな点を取」というのは、末番の意味か？　しかし万句合のとくに「景物がいゝ」というのが、のみこめない。

**清**＝不明。

**藤井**＝賞品があまりよいので、欲に目がくらんで、案外作句が悪かった。ではないか。

**川端**＝藤井説賛。賞品当てに応募して、落選したのであろう。「景物」については入花料（投句料のこと）十六文をとり「景物等も従って入念に差し出し候間」とあり「正直を専一」（万句合口演）にした川柳の秀れた選句眼と共に、景物を目当ての投句者も多く、川柳評が繁昌したのである。

**高須**＝内輪バクロで、やや土匪吟じみているが、そういうこともあったであろう。「へん」といえば。この句を川柳翁がとったのが「へん」だが、或はイマシメの意味もあったか？

**丸**＝礎解に賛「評釈川傍柳」には、簡単に「八百長選句」とある。

**岡田**＝判るようで判らぬ句。むしろ、俳句などで相当の練達者が、賞品にひかれて川柳に投句したら、思いもかけず入賞してしまって苦笑……というような意味か。（但し、駄労解）――なお、余計なことながら、初代川柳に投句が非常に多く、東都随一の点者になったのは、その選句眼もさることながら、賞品のよさにも関係があったと想像される。

（5ウ）

79　**おもへば相模てう法な女なり**　八中

**岡崎**＝江戸に出て来る下女奉公の女は、相模産が多く、しかも、

させるほか相模悪気のない女　（末初31）

いんらんの巾着相模持っている　（末二26）

など淫乱女の代名詞的存在であり、古川柳では

柳だる下女読んでみて腹を立て　（タル三七17）

ほどでもある。だからこそ、表向きには下女と称して雇い入れ、ひそかに自由にできるとは、重宝な女である、というわけ。

**川端**＝相模女を雇うと、下女の仕事だけでなく、夜の勤めもしてくれるので、実に調法だ、という句であろう。

**高須**＝「相模女」には類句多く、あげきれぬほどあるが、いずれも「強い」ことを詠っているようだ。それで、この句は、下女が夜の勤めもしてくれる、というようなことより、何でもしてくれる「調法さ」を詠った、それだけの句ではなかろうか。

**前田**＝諸説に賛。上の句の「おもへば」はうまい。

**丸**＝礎稿に尽く。相模下女の強いのは、例の方だけではないか。

**岡田**＝礎稿によると、主人が下女を自由にするような印象を受ける。主人が手をつける場合も、勿論あるが、小生はこの句を一般的な男性の、相模女に対する感想句と解したい。

80　**ゑいとう〳〵といふともふ疊り**　鼠弓

**岡崎**＝雨乞いのお能といわれた能楽「道成寺」が上演されると、雨が降るという俗説があった。町人能には必ず上演されたが、その日は朝から晴天であっても、見物を許されて来た者に雨傘を渡すのが例であったという。その能楽「道成寺」がシテ〝これは紀州道成寺の住僧にて候…鐘の供養を致さばやと存じ候〟とはじまってすぐ、舞台では寺の能力（つかいおとこ）ヶモアイとアドアイが〝ゑいとうゑいとう、ゑいやゑいや〟と掛け声をあげながら鐘をかつぎ出して来る。句は、この掛け声〝ゑいとう〳〵〟が出ると、評判どおり雨が降るのか、早くも空は曇った―という意。

**川端**＝能楽を知らないので、掛声は舞台だけのものか、どうか解らず、不明。

**高須**＝この方面には暗いので、よく判らぬ。礎解でよいと思う。

**丸**＝「ゑいとう〳〵」は、力ワザをする場合の掛け声で、相撲に雨はつきものといわれた勧進相撲の句である。当時の興行場所は一定しなかったが、主に両国回向院であり、興行日数は晴天十日のようであった。興行時期も不定であったが、その頃は

冬、十月であった。回向院の勧進相撲については、今井卯木氏の「川柳江戸砂子」に詳しく、雨を催す句も多く挙げてある。

**岡田**＝「えいとう〳〵」は、興行において、たくさん山の如く御光来あれ…の意に用いる口上の文句で、相撲に限らず、広く用いられているが、どういう漢字が当てられるか、不明。丸氏のいわれるように、力ワザをする掛声の一種といったようなもので「ウンウンというほど」押すな〳〵の大入りを希望する…という意味で、当時のあらゆる興行の口上に使用された。「柳多留」十篇の序の末尾にも〝猶亦、来申の春、昱を例として角力会催の節は、えいとう〳〵の大寄せ、書肆希のみ〟とある。あるいは「梅若の地代は宵に定まらず」で、とかく雨が多かったという三月十五日の木母寺の梅若祭の句かも知れない。

〔**再記**〕その後「俚言集覧」を調べたところ「えいとう〳〵＝往来の衆多きをいう。昔、上野東叡山に花見の有りし頃、或人の句、上を下へエイトウ山の花見かな」とあったので、やはり礎稿の御能拝見説が、正解であろう。

81　**長屋中寄ッていたづら者へすへ**

米　子

**岡崎**＝もてあまし者のいたずら小僧へ、こらしめの灸をすえる。「長屋中寄って」が市井感覚を描いて面白い。

**藤井**＝悪戯常習犯人に、長屋中の制裁である。日頃のウップン晴らしに、皆で取って押さえてであろう。

**川端**＝この「いたずらもの」とは鼠のことではないか。「いたずらものは居ないかな、鼠とり」などとふれて、売り歩いた石見銀山を、長屋中申し合わせてここかしこに置いた。という句と思うが……。

**高須**＝「いたずら者へすえ」だから、鼠退治としては、少し表現がおかしい。やはり礎解でよいのではないか。

**前田**＝石見銀山を置くのだとすると、原句の「すへ」がひびかない。礎解に賛成。

**丸**＝「川傍柳評釈」の解を紹介しよう。柳「制裁を加えることを、灸をすえるといえるか疑わし。三「止める仏性が五分、心を鬼にしたが五分、腕白とうとう一つすえられた。――従って、礎稿よし。

**岡田**＝礎解に賛。

**川端**＝「いたずらもの」の語にこだわりすぎた。取消す。

82　**三日月を二ツこそげるおしい事**

鼠　弓

**岡崎**＝「三日月」は少女の眉、その眉を二つ剃り落とすのは、女の元服（結婚後、或は相当の年齢に達すると、眉を剃り、鉄漿をつけ、髪の風まで変えた）であるが、いまさらながら惜しいとの感傷。

**藤井**＝賛。きれいな句。小町娘であろう。

**高須**＝元服も二ツ剃刀は女なり（タル八39）で、男は前髪を一ト剃刀でよかったのを、女は眉毛を落としたので二ツ剃刀必要であったわけ。「下女が元服八の字を消す斗り」という句もある。それで「三日月眉」を落とすのは「惜しい事」だというので、それだけの句であろう。

**前田**＝賛。愛敬を二つ落とす惜しいこと（傍五31）よりすぐれている。

**丸**＝「こそげる」は、けずりおとす事、同篇に「おしいこと月にたとえるものをとり（24オ）がある。

**岡田**＝諸説に尽く。

83　**つくと出すから突出しと牽頭いゝ**

牛　滝

**岡　崎**　牽頭は幇間＝太鼓持だから、句は、幇間の駄洒落。「突出し」とは、売られて来て初めて勤める遊女で「初めて見世に突出されるので、この称がある」（川柳大辞典）とあり、吉原に「禿」として、廓の中で成長して女郎となる「新造」と違って素人出身である。従って、バレがかってい

突出しは気遣るをもって尊がり
（タル三三）

突出しは生野の道をとっぱずし
（タル六三）

ということもあっただろう。

**高須**＝「つくと出す」とは、とんだバレ句だが、幇間がいるのだから、相当の大尽遊び。それでそのお大尽へ、幇間がオペンチャラをいっている句と見る。

**丸**＝　礎稿賛。幇間のオペンチャラとまで見る必要はあるまい。駄洒落だけでよいのではないか。

**岡田**＝礎稿よし。

二月五日開

84　**松をとる中を一客送られる**

閑　々

**岡崎**＝吉原の句かと考えられるが、どういうシチュエーションかわからず、お手上げ。垂教を乞う。

**清**＝松に関する句は、かなり多いが、この句がはたしてどの分野に入るものか。一応松飾りと解したいが、さてどんなシチュエーションなのだろうか？

**藤井**＝吉原の句には違いなかろうが「松をとる」が「一客」と無関係。喜の字屋の台の物を注文したのに、もうお客が一人帰って行った。繁盛なことだ、と無理に解してみたが、自信なし。

**川端**＝不明。「松」は吉原の松飾り、仲の町から左右に分かれて飾る五丁町では、背中合わせに飾る奇習があった。「松をとる」だから、正月の七日朝から来た客が、他に客もないので、途中まで送り帰されたものか？　廓に正月の休日があったか、どうかが疑問。

**高須**＝廓の休日とは関係なく、七日の朝一人の客が送られて帰る、情景でよいのではないか。華やな廓の松飾りも、取り払う時が来れば取り払われる。六日に登楼した客が、普通に七日の朝帰る。丁度仕事師達が松飾りをとっている最中、でざわざわしている。送られる客は、その中をわびしく帰って行く。そのざわざわしさと、わびしい心理とを取り合わせた、当時としては一寸珍しい心理派川柳と見たい。

**前田**＝「松飾り」か「喜の字屋の台のもの」か、私は藤井説の後者をとりたい。しかし、二月五日開とあるから「松飾り」かも知れない。丸・岡田両先生いかが。

**丸**＝私は高須説と考えている。

**岡田**＝吉原では、正月三ヵ日は客をとらず、開店休業。但し、最員客に御祝儀として「御仕舞」の札をせびって出して貰う。一日買切りの費用を出して貰うので、その

札を多く並べるほどよい客を持っているオイランということになる。松の内は、やはり遊客は少ない。この句は、高須説の通りだが、こうした吉原の松の内の景も頭に入れておくと、一そう情景がはっきりすると思う。ちょっと俳味を帯びた佳句である。

85 **貳度めのは匁に掛ると十五〆匁**　泉河

**岡崎**＝ぱっとした金三浦屋へ二度はいり（タル七）宝さかって三浦屋へ二度はいり（傍五）のように、吉原三浦屋へ二度も大金が入ったのは仙台六十二万石伊達綱宗が万治高尾を身請けした時と、播州姫路の城主榊原侯が、六代目高尾を身請けした時である。その二度目の榊原式部大輔の知行が十五万石だったので、それを川柳的に数詞表現した句にすぎない。

**川端**＝賛。榊原高尾は、七代目とも、十代目ともいわれる。

**高須**＝礎解通りであろう。但し、この句どう読むか？「二度目のはモメンに掛けると十五貫目」では、やや破調だが……。

**前田**＝賛。読みは、それでよかろう。

**丸**＝賛。

**岡田**＝読みは、高須説より他あるまい。

86 **愛欲の出る迄灸をすへる也**　五島

**岡崎**＝娘は可哀そうに労咳（初期の肺結核）である。蒼白く痩せおとろえて、陰気に沈み込んでいる。療法として四火（四花患門）の灸をすえているわけである。労咳が快くなるまで、つまり自然に愛敬がほころびはじめるまで――。

四火をすえ一火一火に熱いかや（タル四20）

という情景であろう。

**藤井**＝昔は、いまの肺結核とノイローゼ（恋の病）とを一緒にして「労咳」といっていたのだから、灸なども案外きいたかも知れぬが……。

**高須**＝藤井医師の診断通り？

**丸**＝諸説に賛。

**岡田**＝その通り。

（6オ）

87 **惣花の隣やったら手をたたき**　五扇

**清**＝「惣花」は前出、説明の要なし。惣花で「生きとし生ける物」が出てしまい、他の座敷はお客のみ。「惣花の隣いともの静かなり」となってしまったが、我慢のならないのは、そのお客、そこで「やったら手をたたい」ての催促となる。この場合、隣は惣花の隣と限定せず、他の部屋部屋と広く解釈した方がよいと思うが、如何。

**藤井**＝礎稿通りだが、隣は、賑やかな音を壁越しに聞いている隣室と、狭く解した方が「やったら手をたたく」客が、見えるようでよいと思う。

**川端**＝藤井説に賛。直ぐの隣室だからこそ「やったら手をたたき」が生きる。

**高須**＝この「やったら手をたたき」にはヤククソの気分が感じられる。隣はやはり「近いとなり」が面白い。要するに、立腹すれずれで、手を叩いているのである。

**前田**＝諸説に賛。隣はやはり隣でよい。

**岡崎**＝高須説、面白し。

**丸**＝他に考えようなし。諸説に尽く。

**岡田**＝同。

88 **にょいにょいと竿の立てるきついしけ**　閑々

**清**＝単に、しけている時の港風景であろう。「にょいにょいと竿の立てる」は、難難している舟の帆柱と思うが、何か故事来歴があるか。

**藤井**＝表解は清説として、これを紀文大尽の大門たてきりの、古原総上げ句と、とってはどうか？　すなわち、吉原へ行けないので、江戸ッ子連、その夜は大竿・小竿をにょいにょい立てていた、とバレに解することは出来ないか。「きついしけ」は、もちろん紀文が乗り切った暴風雨である。

**川端**＝「しけ」は、ここでは「長雨」。雨が降り続いていて、五月節句の竿だけが立っているという句であろう。

**高須**＝こういう、何も特定のものを出していない句には、いろいろ「だろう解」が出るが、藤井説は少し行きすぎだし、川端説の鯉ノボリの竿だけ立っている。というのも「きついしけ」が利かぬ気がする。ボクは旅回りの興行不振と見たい。それで、ノボリも出せないので、その竿だけがムダに立っている。という句で、ドヤについている旅回り一座の風景というのは無理か。「きついしけ」は、天候よりも不景気と解したいと思うが。

**前田**＝諸説みな面白いが「にょいによい」にぴったり来る説がなくて、どうも賛成しにくい。竿を男のシンボルとして、きついしけのために遊里に行けない男たちが、いらいらしている、と解したい。それなら「にょいにょい」が面白くひびくが。

**岡崎**＝礎解でよいと思うが、藤井説が加味されても面白い。

**丸**＝諸説それぞれに面白い。だが、本句は川端説でよい。当時のノボリは、紙ノボリだから、雨にあっては一たまりもない。そこで

さりとては又とノボリをひっこませ（タル五29）

と、折からの五月雨の晴間晴間にノボリを出す忙がしさも見られるわけ。「川柳年中行事」には、本句のほか

棹ばかり立てて蒼求たいている

五月雨が晴れると鯉のたきのぼり

雨雲のきれめきれめに紙ノボリ

等の句を挙げている

**岡田**＝「しけ」は嵐。だから、小生は礎解の港風景と解している。（なお余計なことながら、こういう句を、バレに解することは絶対に不可。初代川柳時代には、裏にバレの意を含ませた句はない。表はただの句で、裏にバレを含ませた「フクミ」というのは、狂句になってから出た悪弊である。注意されたい。

**藤井**＝高須説が面白い。五月雨でなく、台風のため興行不能で、芝居もしけというのが、妥当と思う。

**丸**＝「しけ」は長雨でもよいと思う。本集16ウにも「甲冑のねばついて来る永いしけ」とあり、自説を捨てきれぬ。「にょいにょい」というのも、帆柱よりは、ノボリの竿の方が感じがぴったりする。

**前田**＝諸説了承。しかし「にょいによい」が、どうもぴったりしない。

**岡田**＝なるほど、原句は竿だから、丸氏の鯉ノボリ説がよかろう。前言取消す。前

田氏不得心の「にょいにょい」は、鯉ノボリの竿が、あちらこちらに立っている風景として、承知してもらおう。

89 **いかに春だってとせつく草紙売**　門柳

**清**＝「草紙売」がよくわからぬが、店において売ったのではなく、売り歩いたものであろう。行く先々で、長々と品定めをされて、いくら日の長い春だって、商売にならないとせつくというであろうか。

**藤井**＝いくら春だって、呑気に売り歩いてはいられぬ。商売商売と売り急ぐ、草紙売りをいったのであろう。

**川端**＝「草紙売」は絵草紙・一枚等を売り歩く行商で、「せつく」はせきたてることだから、見るだけで、買うのかどうか、はっきりしない客を、草紙売がせきたてている句である。

**高須**＝「草紙売」は川端説通り、ちょいとイナセな恰好で売り歩く絵を見たことがある。「いかに春だって」とせつくのは、その草紙売りのコツであまりいろいろ引っぱり回されぬように、適当にせつくのだ。

**前田**＝藤井説をとる。

**岡崎**＝「いかに春だって」は、何かの文句取りでないか。

**丸**＝川端・高須説に賛。行く先々で、こうやられては、いかに日の長い春だって、商売にならない。さっさと見て、買うのか買わないのか、さっさときめてくれと、催促するのである。

**岡田**＝賛。別に文句取りではなかろう。

90 **数の子をなくなる迄ハ撰て喰**　東里

**清**＝ズバリ、そのまま、説明の要なし。

**藤井**＝よいのを選んで、よいのから食べる集団的食べ方と、クズのを選んで、クズのから食べる独楽的食べ方と、二通りあるが、これはもちろん前者であろう。ミミッチイ解釈かな？

**高須**＝何を食べるにしても、多少は選び食いをするものだが、その句は「数の子」で文句なし。ボクなどは大勢の時でも、独りの時でも、形のよい、摘みよいのから先ず食べる。

**前田**＝平凡な句であるが「なくなるまでは」がうまい。

**岡崎**＝よさそうなのから拾って食って行くが、結局は一つ余さず食ってしまう。

**丸**＝諸説につく。中七から下五は、凡手ではない。佳句。

**岡田**＝先ず正月の句であることを、誰もいわなかったのは下思議。当時（現代でもといいたい所だが、今は貴重品で、使用不能）正月の料理にはつきもの。数の子は子孫繁栄の意味で、鯛・昆布・海老（メデタイ、ヨロコブ、海老は老で長寿）と共に、正月必ず使用した。サラサラと歯切れがよく、口倦きがしない。従って、なくなるまで食べてしまうのは、南京豆などと同様。それで

大概にしろと数の子ひったくり　（タル七28）

という事にもなる。よく目にふれる日常茶飯事を詠んで、佳句である。

91 **波のうつ音斗(ばかり)きく本望さ**　閑々

**清**＝曽我十郎祐成は、討入りに千鳥の模様の狩衣を着ていたが、紋所も浪に千鳥。そこで、祐成が祐経を討って、父の仇を報じた時の心境は、こんなではなかったか、とこの句の作者が考えたのではないか。

**藤井**＝「本望さ」が、仇討ち―千鳥―曽我兄弟となったのだろうが、品川で遊んで既に本望とげて、うつらうつらと波の音を聞く幸福感を、こう詠んだものと思うが、如何？　自信はないが……。

**川端**＝「浪」は「浪銭」ではないか？「浪銭」とは、背面に浪の模様ある寛永銭のことだが、盲人が検校の位を得ると、必ず礼参りに江の島弁天社に詣ったので、こつこつ貯めた（金貸しで）金の音と、江の島の波の音とをかけたものではないか？

**高須**＝各人各説、皆よく考えたものだと思うが、ボクにはわからぬ。

**前田**＝先ず川端説をとる。盲人がせっせと貯めた浪銭を、見ることは出来ぬが、その音を聞く満足感は、十分味わうことが出来る、という説と、もう一つは、芝居の浪幕を「浪」といったのではないだろうか、という説である。なかなか行けない芝居を見ることが出来た、その満ち足りた心情を詠んだ句、と見ることは出来ぬか。

**岡崎**＝川端説が面白いが、他に適解がありそうな気がする。

**丸**＝川端説でよい。ただし「貯めた金の音」とまで考える必要はない。盲人ゆえ浪の音を聞くばかりで、見ることは出来ないが、それで満足だ、という句である。

**岡田**＝その通り。検校になって、御礼参りに江の島弁天に行った句である。いわゆる作った句だが、盲人の心理を描いて、さびしさを感じさせる。

**前田**＝「波のうつ」の「うつ」を、解釈されたい。

**丸**＝江の島は岩山だから、波の打ちあたる音も激しい。寄せては返す波の様子は見られないが、その音ばかりを聞く、といったのである。

**岡田**＝江の島弁天堂のある岩クツは、島の東南の突端、外海に面した所を降りた波打ち際にあり、土用波や台風時には、洞クツ内に波が打ち込むため、昔は旧四月から十月まで、弁財天を山の上のお旅所に移したが、目下は裸像で有名な弁天様は、山頂のお宮の方に安置されている。

## 輪講訂正（前号）

12頁上段九、十行目（タル二六）Hハ（タル二六）不酔
同　三段一行目「衣蟬」がノがハ不要
13頁二段三十一行目「竿の先へ系」ハ竿の先へ糸」
同　三段二十五行目原句「らつ木」ハ「うつ木」
同　二十六行目「眼狐」ハ「眠狐」
同　二十七行目「らつ木」ハ「うつ木」
14頁二段三行目「眼狐」ハ「眠狐」
なお原句を左の通り訂正する。
66　詫言で息子ハ広い座敵なり
70　うつ木杯切て火縄をまき付ける
77　作兵衛様ハ御宿かと大晦日

**バック・ナンバー**

本誌のバックナンバーの株が天井知らずに上っていますが、趣味的に製本される人達のために出来るだけサービスしますからこの機を逸せず在庫の有無を往復ハガキでお問合せ願います。

# 福岡阿彌三氏の横顔

山村祐

この夏のある夜、阿弥三氏と深更まで飲む機会を得た。氏と二人きりで話したのはこれが初めてなのである。今まで氏と同席したのも会合の席上などで五、六回ぐらいであろうか。氏に関する私の知識は深いとはいえない。しかし私にとって氏はなかなか印象深い川柳の先輩である。

まず氏の略歴めいたものに触れてゆこう（当夜飲みながら氏から聞きだしたものを含めて）。

関西の柳人には或いはなじみがうすいかもしれないが、横浜の柳壇はすぐれた作家の続出するところだ。今では明らかに特異な伝統を築きあげている。北村雨垂、三橋鬼簽子、中村冨二（冨山人）、金子勘九郎、片柳哲郎、これらの人々は私の尊敬してやまない好作家である。そしてこの横浜柳壇の理論的バックボーンとなってきたのが阿弥三氏であるといってはいい過ぎであろうか。もちろん以上の作家すべてが阿弥三理論に同調しているわけではない。しかし川柳という詩の体質や傾向や将来を考えるとき、直接間接に阿弥三氏の果した啓蒙的役割はじつに大きいものと私は考える。それに加えて中野懐窓氏という包容力の大きなまとめ役の存在があって、横浜柳壇独自のグループ的色彩を濃くしている。その傾向を知るために一句ずつ諸家の佳品を御紹介しよう。

カレンダーに日曜があり今日も疲れ　懐窓

鳥の博士魚の博士は幸福な　兎簽子

実に静かに狂人が見ている盆踊り　雨垂

パチンコ屋オヤあなたにも影がない　冨二

人去れば道標背伸びして嗤う　勘九郎

父に孝に見事みおろすふところ手　哲郎

これらの例句は私の好みによる選出で、阿弥三氏にいわせれば選出に異論があると思う。阿弥三氏の考える川柳はかなり特異な面を持っているからだ。

氏の活動は大体三期に分けられる。

Ⅰ作句は中学時代大正十四年頃の由で、もう四十年にもなる。岡田三面子博士の息子さんと中学の同窓で、多分その影響から作り始めたものであろう。昭和三年九州から上京、東大入学、昭和十年頃北村雨垂氏と知り、十四、十五年頃は特に頻繁とゆききした。当時の横浜は柳誌「紀元」を山本斗酒氏が編集していて、大正から昭和十年頃へかけて活躍した柴田五万石氏の後の横浜柳壇をまとめていた。鬼簽子、小林万川氏らも活躍していた。「紀元」はやがて「路上」となり、文学報国会の「川柳道」に移り終る。これよりさき、昭和十年頃、阿弥三氏は後年の理論的活躍舞台となった「川柳研究」に入り、戦時中半年ほど「研究」の編集にも従っていた。

Ⅱ秋田時代。昭和十八年～二十三年。

ある化学会社の経営を担当する傍ら、作句に励み「日本海」一〇〇句をまとめた。この頃が作品活動の最も旺盛な時期だったらしい。

風も日本海も松も古典だ鳴るだけだ　阿弥三

この句などは確に今読んで充分たのしい阿弥三氏の特色を示している佳品と思う。

Ⅲ茅ヶ崎時代昭和二十三年秋田から転居。調布の米軍調達部の研究室勤務。この時代はよく知られている通り川柳研究を中心とする華麗な理論活動期で、現在に至っている。

阿弥三氏の功績は何といっても超現実主義詩論を川柳界に紹介し、啓蒙的な実践活動を根強く展開してきたことであろう。超現実主義が二十世紀の芸術の性格を全く一変させたことはよく知られているが、これは日本の詩についても例外ではない。

日本に於て超現実主義詩論の最も独創的な紹介者は西脇順三郎教授だが、今日の三十代四十代のすぐれた詩人で、直接間接に西脇氏の影響を受けていない者は少いであろう。そして阿弥三氏は周知の通り西脇氏の熱心な崇拝者である。氏の西脇氏への傾倒ぶりは見事といってよい。

今も現役として活躍する現代詩人の巨大な二本の柱を求めれば、西脇氏と金子光晴氏をあげることに異論はないであろう。古くして最も新しいこの二人の詩人の秘密は、一生をかけて研究するに足るテーマである。二人は資質的に対照的にみえるが、ある一点で一脈通ずるもののあることを感じる。何か私たちに理解でき難い個所が奥深くにひそんでいて、それが彼らの詩人的活動の源泉となってい

るようだ。また西脇氏が、最も影響を受けたのは萩原朔太郎であると自ら告白しているのは、一見奇妙にみえるが、なかなか味わいの深い言葉である。朔太郎と西脇氏、これほど遠くに座っている詩人はないかに思はれるだけに、私にとっても非常に好奇心をそそられる言葉である。濡れた抒情とか乾いた抒情とかいうアイマイな割切り方でなく、新しい抒情の性格を探究するにも、よい足がかりとなろう。

思わず道草を喰ってしまったが、どちらかといえば金子光晴氏に傾倒する私は、阿弥三氏との資質の差をつよく感ずる反面、阿弥三氏の考えるこれからの川柳というものが痛いほど解るように思われる。それだけに、永い期間孤独な啓蒙家として果たしてきた氏の業績に深い尊敬を懐くのである。

一ト頃の氏はかなり辛辣な毒舌家として通っていた。それは氏のモドカシさがさせる業であったのであろう。中村冨二氏を中心に一〇人ほどで発行していた「鴉」二十二号（三十一年八月号）の座談会で阿弥三氏を尊敬する片柳哲郎氏がこんな発言をしている。

――僕はね「路」の十四号に、彼と雨垂、懐窓の座談会記事があったので読んだんだが、我々以上の暴言を吐く「現在の詩川柳観」に対して、阿弥三氏曰く「悪口をいえる線まで行っていない、大分その線までは遠い」とある。それが富山人の「少年抄」についての批判のあとだけにグッと来た。（中略）僕は作品の下手、上手のことならなんでもないが、現詩川柳界の線が悪口をいえる線までは程遠いといわれて、そのいっている人の作品を時々拝見するに及んで一言文句をいった……

といかにも哲郎氏らしくズケズケと発言している。哲郎氏はそのあとの方で、

君や動悸の罪障深き胸の丘　阿弥三

の句をあげ、どうしてこういう句を最近発表してくれないのかな、と結んでいる。

検名湖畔に於ける
福岡阿弥三氏

冨二氏の「少年抄」は当時評判になった群作であり、確かにすぐれていた。阿弥三氏にその価値が解らない筈はない。むしろ近代川柳としての価値を高く評価しているだけに、そのトップクラスのものに対して意識的に文句をいったのではないか。そうした到達点なしには、阿弥三氏の考える川柳は生れないことを感じた上での発言ではなかったか、と私は考えている。そして雨垂、阿弥三両氏を最も熱心に研究しているのが外ならぬ哲郎氏であることに、私は深い興味を持つのである。

作品を書く評論家のつらさを阿弥三氏も時々洩している。読者、特に句作に個性と才能をもつ作家ほど概して厳格でセッカチのように思われる。評論家が批評や評論で述べることは川柳はかくありたいとの希望であるか、句の形式で表現することの不適当なことを評論の形式で引出そうとしたものである。もともと句と評論とは質の違う表現様式であることが忘れられ勝ちだ。偉らそうなことを書くお前の作品は何だ、では少し子供ぢみてはいても、それが作家の本音というものであろう。しかし作家ももっと寛容であっていい。句で創造活動をする才能と評論で創造活動をする才能とは、お互いに影響し合い反撥し合って進むのだから。

「句で表わせぬその捌け口として批評に似た形式を藉りて書いてしまうのである。だから句がいつでも後になる。逆にしたいと思いながら出来ない。誰かが実作で示してくれてもいい、或はその方がいいとも考えている」（昭和二十六年九月「鴉五号」この阿弥三氏の希望に応えた作家が北村雨垂氏であった。それも終戦後何年かの沈黙の後に発表しだした雨垂氏の作品である。

私は今まで「川柳研究」にのせられた阿弥三氏の数々の評論に触れることをしなかった。その内容の紹介は小文ではつくせないからである。最も単的に氏の考えを覗うには「天馬」一九号（三六年二月号）に発表された「北村雨垂論」を一読するのがいいと思う。ここには具体的な作品の解説を通して氏の川柳観が明白に語られている。

画家よ私なら一切を無色で描く　雨垂

純粋な灰色に梟が鳴いた
北風に柿が某戦犯の夢を描いた

色彩のある「落書」を未だ見ぬ巴里だが

これらの句についての阿弥三氏の観賞は誠に適切だ。例えば「北風に梢に残った一個の熟れて真赤に輝いている柿と戦犯者の夢との取合せの妙に感じ入ったらしい。赫々たるもののうらさびしさ、その感じが痛烈である。奇妙なアイロニイがある。最後の「落書」の句はシャレタ句である。氏にしては珍しい抒情がある。しかしセンチメンタルではない。落書は大抵黒の鉛筆である。色彩のある落書というところに妙な抒情が出ている。それと未だ見たことのない巴里と結びつけたところが、なかなか洒落ている」（以下略）

雨垂氏の作品を最高とみるみないは私たちの自由だ。しかし確かにある一つの新しいタイプを創造している。そしてこのよき仲間を得られた阿弥三氏の倖と、更に今後の発展を祈って筆をおくことにする。

# 頭に残る川柳句集

東野大八

人間のアタマというものは妙なものである。くだらんことをいつまでも頭の底にこびりつかせている反面、ひとから、おめえむかしこういうことがあったぜ、といういい方でギョッとするようなことをきかされる。

ぼくなど、軍隊やその他のことで十一度も死に損なっているせいか、そのショックのたびにコマカイことをキレイサッパリと忘却の彼方に押し流している。これとともに、新聞屋という記事作りが日毎に波とうの如くわが一つしかない頭を押し包み、押し流していくので、満ち潮、退き潮のはげしいナギサのようにあとには何も残らない。

こういう頭脳労働者になるときまって酒が入るから肉体労働者のニコヨン並に、いつのまにかかえって単純、イボガエルの如き頭になりおうせる。

わが老妻は、何年何月にこういうことがあり、今日という日はあんたが酔っぱらって転んで三日寝た日の何年目に当る、というくだらんことまでカミさまのように指摘する。電話番号もある程度まで電話帖なしで空んじていたりする。ぼくとは頭の組織がまるで正反対にできている。

ところで、こういう頭が、時により相手次第で話をするとき、パッパッと川柳の一句、一句がきめてのように話の合間をみてはとび出してくる。ある場合など、こんな句をオレの頭のどこが覚えていたんだろう、と自分自身で小首をひねるときがある。

潜在意識という奴はえてして本能と一衣帯水だが、川柳句の記憶ということはまさか本能的とは無関係だろう。だが、それが折にふれ絶えずとび出してくるということは、脳細胞の一つが二つに、川柳だけで凝り固ったしろものがあるからに相違ない。

さて、そのとび出してくる句だが、もとよりそれらのすべてがわが魂をそぞろにさせた名句、ケッ作、神品だけとは限らない。およそハシにも棒にもかからないものの方がかえって多い。

そういうガラクタが転げ出てくると、じろりとそいつをぼくは一べつして、困った野郎だ、と舌打ちする。ときには思い切り張り倒してやろうかこいつ、とカッとしてしまうことすらある。

—さあことだ馬の小便渡し舟
—オレはクビ女房は師走にたいこ腹
—たんつぱがのどに落ちると冷っこい

書いてりゃキリがないが、こんなフウだ。右川柳のザレ句より、どこかの句会か、どこかの三文雑誌でお眼にかかったような以上のごときしろものがヤタラとある。

こういう句は、アルコールが相当ぼくの頭に蓄積された場合、ド素人の、ぼくの酒の頭に似合った連中との一座によく出てくる。こういうときには、相当アタマもふざけていて、しゅうち眼をおおいたくなるような未消化的エロ句も傍若無人にちょうりょうする。

また、かなり知的なグループを意識しての話だと、こちらの頭もそれなりに緊張しているとみえ、低回趣味はあるていどカゲをひそめる。

—君、見給えほうれん草が伸びている　（路郎）
—電柱が都へつづく懐しさ　（水府）
—虫けらもやはりおのれの世と思い　（剣花坊）
—売られたは三味線に手の届くころ　（三太郎）
—芭蕉去って一列白き波がしら　（太郎丸）
—二等分しても心の手が並び　（日車）

といったところが一つずつセキ払いをしてはゆっくりと登場してくる。

普通の人と、気さくに話をしている場合だと

—日本語で飲んで朝鮮語でケンカ　（暁明）
—この鮎は藤樹先生も食べた鮎　（路郎）
—垣一つ安心という気持だけ　（暁明）
—打ち明けて話す相手も無一文　（岸柳）
—着古した背広を一つおいて死に　（水客）
—椅子の背にもう青春が消えていた　（路郎）
—月に吸われ戸も閉めないで出ていった　（路郎）
—ほのぼのと元日になる酒の色　（豆秋）
—鉛筆がないので二階から下りる　（豆秋）
—盗まれた柄古着屋で風にゆれ　（没食子）
—働いているぞ弁当持って出る　（文蝶）

この方は書いていればキリがない。めっぽうやたらの句のオンパレードで、舌ぼうの如何に相応して右往左往、交通巡査がいるぐらい。以上あげたのは、これを書いているときに次、次と顔を出したのをひっとらえたまでで、句の巧拙、名句、駄句の区別はもとよりないが、いえることはこの句のど

こかがさしずめぼくのアタマのどこかにひっかかり、巣食い、根を生やしたとみるべきだ。作者名までいちいち覚えているところはさすがだ、と思って頂きたい。（ニヤリ）

凡俗川柳は、どうも終戦直後のものが多いのも、民のカマドの不如意から、わが感性にアピールしたものとみえる。

—このごろの民のカマドは電熱器

—働かぬ奴が争議の先へ立ち

—ガード下今日も天使と靴みがき

—白旗のあとにはびこる赤い旗

—あのときにやめりゃあよかったイヤホーン

—売ったとてへらないものを女持ち

—米持参かとまっさきにきく旅の宿

—西陣のキモノが汚いイモに化け

戦後も遠くなりにけりで、やはりこれはアタマの奥の方に窮屈そうに坐っていて出てきてもらうにはかなり手間どった。

古いむかしだが、今治の長野文庫さんが「せんりゅうのおと」という可愛いい、小さなホンを出されたことがある。十冊あまり頂いたが、今はみんな人にくれてしまって一つもない。だが、この小さい本が、せんか紙でザラ紙の表にゴジックで、表題だけの文字であったことを今もハッキリと覚えている。最後の時事川柳はどうやらこの本からアタマに移動してきたものらしい。おぼろげながらそれがわかるのである。

人すべて今わのキワの死の床に、その身生涯のすべてをくり返し、くり返し丹念に反すうしていくサガを持っているが、往生ぎわの悪い奴は、それ相当の不義理をやり通してきた奴で、ときには他人を半死半生の目にあわせた連中に多い。罪のかしゃくが身を責める形になって、いかに放胆無頼の人間でもウナされることの多きを思う。その点、あちらこちらと気のいい川柳をまぶしては、独り死の床でニヤニヤしていられるのも川柳ボダイ、川柳頓生の仏性のきわみというべきだ。このイミから路郎先生が「心に残る句を作れ」とはいみじくも一つの教理というほかはあるまい。川柳人にとってこれはおシャカさま以上のお訓しともいえましょう。ナム川柳頓生ボダイ。

× ×

## 現代柳人録

（一）姓名（二）雅号（三）別号（四）現住所（五）生年月日（六）出生地（七）職業（八）電話（九）自信の句一句（一〇）川柳以外の趣味（一一）配偶者の有無（一二）川柳に手を染めた年月

### （215）新川博也

（一）新川博也（二）博也（三）——（四）大阪府泉北郡高石町富木府営住宅五三（五）大正十一年四月十九日（六）大阪市（七）大阪市電交助会（八）堺鳳局⑦二五七四（九）**抱負なぞ崩されてゆく街の音**（一〇）——（一一）有（一二）昭和十六年六月

### （216）福島鉄児

（一）福島鉄次（二）鉄児（三）——（四）大阪府門真市大字古川橋六六五（五）明治四十一年四月二十一日（六）大阪市（七）会社員（八）——（九）**家裁から出て人生をやり直し**（一〇）——（一一）有（一二）昭和二十四年二月

### （217）臼井三林坊

（一）臼井幾夫（二）三林均（三）——（四）玉島市陶三八七八（五）大正四年十月十八日（六）岡山県小田郡矢掛町（七）農業（八）玉島三一六三（九）**峯の雲動いて誰か死を急ぐ**（一〇）囲碁（一一）有（一二）昭和十一年三月

### （218）河村露村女

（一）河村夕子（二）露村女（三）種子（四）伊丹市御願塚字大越二二九（五）大正元年十二月二十六日（六）大阪市北区神明町二三（七）無職（八）伊丹五五九八（九）**今日のあるかげの力を恩と云う**（一〇）読書（一一）有（一二）昭和九年春

### （219）林一六

（一）林道之（二）一六（三）——（四）大阪市東住吉区田辺東の町二丁目二二（五）明治四十三年十二月十九日（六）大阪市（七）会社役員（八）七四一局五五六七（九）**瓦斯ボンとついて平和な台所**（一〇）写真・旅行・音楽（一一）有（一二）昭和十年九月

### （220）西村芳川

（一）西村良一（二）芳三（三）——（四）大阪市城東区北中浜町三の八五（五）明治四十四年四月二十五日（六）三重県亀山市野登町（七）公社社員（八）九六一局八三四二（九）**大阪を大阪にする法善寺**（一〇）ハイキング・スポーツ・史蹟（一一）有（一二）昭和五年春

### （221）大森娯句楽

（一）大森実（二）娯句楽（三）——（四）岡山県三原郡吉永町福満六三八（五）明治三十五年三月十日（六）岡山県吉永町福満六三八（七）日生信用金庫吉永支店長（八）吉永一五二（九）**ひとしきり満座ストトン節が占め**（一〇）古書画・陶器・古銭・切手・刀剣（一一）有（一二）大正中期

### （222）森本法泉子

（一）森本哲二（二）法泉子（三）——（四）鳥取市中町四三（五）明治四十一年二月七日（六）松江市（七）元銀行員（八）——（九）**モーニング煙草を入れるとこがなし**（一〇）バラ作り（一一）有（一二）中学生の頃

### （223）藤井明朗

（一）藤井明雄（二）明朗（三）——（四）島根県大原郡木次町大字森町（五）明治四十三年十一月七日（六）島根県大原郡木次町大字森四四四の五（七）公務員（八）——（九）**窓閉めて俺せな日々早う寝る**（一〇）旅行・碁（一一）有（一二）昭和十四年五月

# 近作柳樽

麻生路郎選
北川春巣選

俺の代だけの仏壇かと思い　新潟浜市　安藤　桂仙
腑甲斐なやとっさの嘘もよう云わず　同
じっとして居ても良いのが車購い　同
ぐれた子が出来て隣も遠くなり　同
お百度を踏んで元金だけ戻り　同
親馬鹿は見向きもしない子を案じ　同
共稼ぎ明治の知恵に子はまかし　今治市　越智　一水
百姓がバーのマッチで炭を焼き　同
水車小屋村では文化財となり　同
花嫁は重労働ねと披露宴　同
小さいラッキョ作る工夫する　鳥取県　鈴木村諷子

空手形の向うで人ら踊っとり　同
刑務所へ行って来たのの帛がつき　同
千円につく菓子折をペロリかな　同
舟に住み港みなとの水の味　枚方市　宮川　珠笑
重油敷きつめて地平線夕焼る　同
父になるオッチョコチョイの抜けぬまま　同
予定日へ家出の如き用意して　同
爆弾を抱えた心地児が寝つき　竹原市　大洲大八洲
抱いてる児をオッパイへ連れ去られ　同
うかつにもトイレの窓の瞳と出会い　同
孫抱けば謡曲の節の子守唄　同
春は伯母秋は伯父きが死にいそぎ　倉敷市　水谷　谷水
武家屋敷通りは秋になりきって　同
長男の志望をいれて惜しがり　同
赤い羽根つけて気楽に歩かんか　同
ラッシュアワーの逆の「ース」に左遷され　仙台市　平野　光道
家康を机上に勧告無視する気　同
師走の灯ダイヤの色を冷たくし　同

## 柳志寸言

本多柳志

### かくれた美

芭蕉は常に門人に教えるのに「いいおうせて何とする」といっております。俳句の様な短い文章を書くのに「何もかもいってしまってどうするのだ」という意味でしょうか。谷崎潤一郎は文章読本の中で「凡そ名文とは、読者の聯想の範囲がより広くて、そして長く印象に残るもの云々」と書いております。虚子は「俳句とは万斛（ばんこく）の憂いを蔵して僅かに一語を発するもの……」と教えております。路郎先生が作句に省略の重要性を力説されている事も又御承知の通りであります。

一、赤いバラが咲いていた。

二、美事なバラが咲いていた。

何れもバラ園の美しさを描いた文章でありますが、一の文章の読者は赤いバラのみを想像する丈でありますが、二の文章の読者は、赤黄其の他自分の好きな色々のバラを想像する事でしょう。つまり一よりは二の方が聯想の範囲が広いという事になり名文という事になるのであります。

選をしておりますと、初心の方と思われる人達の句の中には、色々の材料を凡て詠みこもうとし

お針に弱いと云う娘のマニキュア　同

皿皿皿明日へ重ねて主婦の愚痴　羽曳野市　古川　静波

真夜中の音の一つにパパ帰る　同

肉を切る音がしそうな手術室　同

日記へは夫と書いてこき使い　同

いい返事とぼけて見せて二度も聞き　竹原市　山内　静水

道連れが美人ぴったり合う歩巾　同

妻の留守こうまで人が訪ねて来　同

恋だろうか風にも色がついて見え　新居浜市　小林　孝正

間違って起きて空気の味を知り　同

円満な人と妥協をほめてくれ　同

アイシャドー親に従う顔ならず　京都市　大久保　和三郎

組の名で生きて本籍地を知らず　同

十二月定時に帰り案じられ　同

父いつか追伸にいる娘の手紙　金沢市　山本　木象

秋静かトタンへ熟柿落ちた音　同

どっこいしょ祖父に似て来る父のもし　同

提灯が一番似合う京都の灯　大阪市　林　緋砂子

円満なお方と云われ無策でい　同

不動明王わたしの心を男にす　同

金借りに来そうな今宵の月あかり　大阪市　西本　保夫

適当に心臓もあり平社員　同

運動会涙ぐんでる年齢となり　同

変人と云わず個性の強い人　西宮市　末沢　花美

闇に甘えて勝気涙をこぼす　同

名月を忘れて歩いて来たデイト　同

文例にあり松茸の出来に触れ　岐阜市　日東　里

友来り月あり今宵酒豊か　同

立読みが今日もページを折って夫に　同

妻も子も捨てて酒飲む劣等感　西宮市　鵜飼　鮎子

着てみたい色が一杯京の秋　同

米を磨ぐ妻に一番先の秋　斎藤　流路

無縁塚太陽だけが惜しみなく　同

パパ送る鞄を運ぶ朝の芸　玉島市　水粉　千翁

お困りでしょうと他人の顔になり　同

十二月握手もゆっくりして居れず　岡山県　永宗　宗義

て、苦心の末却って失敗している事に気付くのでありますが、いい過ぎは余情を失う事にもう少し留意されたらといつも思うのであります。私共は其の全貌を露出している大阪城の巨石にはいささかの美しさも感じませんが、大部分を地下に埋めて僅かに其の一角を見せている、岩壽の庭石には限りなき美と芸術を感じ取る事が出来るのであります。

家内安全厄除賽銭五円也

**条件反射**

エスキモーの犬そりの犬は御者の、鞭音を聞いた丈で悲鳴をあげるという事であります。昔の兵隊は食事ラッパを聞くと、おなかの

貧乏を売り物にして借りに来る　同

左手の置場に困る満員車　大洲市　横田　放人

失恋をして当分は金を貯め　同

心から駈足になる十二月　玉島市　井上　旭峯

木枯へ向いて歩いている暮らし　同

いい娘もって家中花を活け　丸亀市　平沢柚蘭坊

木の悲鳴きこえるような伐採器　同

毛筆の便りへ返事出しそびれ　岡山県　阪部　良江

お待ち遠さまと彼女紅濃し　同

隣へもうっかり行けぬ村議選　竹原市　杉原　愛鳩

勉強は出来ず踊りはよう覚え　同

今乗った女箪笥の匂いがし　青森県　岩淵　一星

流行は尻の魅力をしかと見せ　同

呼びに行った子を呼び出行く子沢山　竹原市　山内　房子

気の毒な話お茶でも出してあげ　同

父さんの停年気遣う脛かじり　八尾市　宮西　弥生

ふところを察した親切歩きましょう　同

つくづくと孫の寝顔へ猪口を嘗め　伊丹市　小川静観堂

敬老年金というもの貰うさわやかに　同

頼母子をかけて色足袋すぐ帰り　芦屋市　里田一ン十

鳩放ち風船飛ばし日本晴　同

プロレスの話姑はほっとかれ　香川県　三井　酔夢

労災の十万この指生えて来ず　同

付き合いがよいのかたち風邪をひき　兵庫県　斎藤たけお

ご時勢で三部経まで早うすみ　同

折詰は空アリバイを知らせる気　岡山県　秋野　萩路

浄瑠璃に泣いたは婆さんだけだった　同

年寄りの記憶長堀まだ流れ　大阪市　藤冨　淀月

入院が今頃たたる菊の出来　同

寂しさを狂うたように弾くピアノ　児島市　伊丹柳瓢子

精勤賞もらってやりたいパチンコ屋　同

ラブシーンを見られた猫が甘えて来　堺市　青山慶之助

貸衣裳忘れて酒でまたゴロ寝　同

トップ記事人事だから読み捨てる　加賀市　木村　一路

ベビー靴一歩一歩を取りまかれ　同

正座微笑弁解もせぬ面憎さ　神戸市　吉田　隆史

へった事に、気がついたものであります。

総理大臣と聞くと偉い人と思い、颱風と聞いた丈で大きな、災害を連想するのもこの種の、錯覚の一種ではないでしょうか。総理大臣にも偉くない人もあり、東京都水道局や電力会社では、颱風は黄金の雨をふらせる福の神とも考えられるのであります。川柳作家が貧乏という課題に、へそくりや内職を連想したり、ゴム長が出れば魚屋、役人が出ると汚職を連想するというのも、斯ういった条件反射的な馬鹿馬鹿しい観念的な幻影に、捉われているからではないでしょうか。

作句特に課題吟の場合、一番妨げになるのは、この条件反射的な既成観念に、捉われてしまう事ではないかと思います。

貧乏の課題に金持ちを連想しても、恋愛やキッスがにがいものと考える事も自由であるし、又そういった考え方の方がいいのではないでしょうか。

信号へあばれみこしの肩を代え

## 満場一致

二人以上の人が集まって何かを議論する場合、参会者全部の意見が完全に一致する、つまり満場一致なんて事は先ず無い、のが多くの場合当然だと私は思っております。若しあったとしたらそれは、何らかの妥協か譲歩の上に生れた便宜上の、満場一致ではないでしょうか。

雨宿りの人達が軒下から見ている雨に対する感慨もまた、其の人

ウインクも知らず車窓を見てばかり　同

仲人は独り喋りでやっと立ち　羽咋市　三宅ろ亭

高三の息子たもとにせいと言い　同

唯一の資産と思う歯に寿命　高知県　山川勝子

免許証中古車さえもまだ買えず　同

思想述べる権利を古老けむたがる　兵庫県　常岡孝風

生きていることの矛盾に菊を活け　同

この阿呆とストリッパーの眼が笑い　奈良市　村上春巳

舞扇置けばあまえる子にもどり　同

天平の甍に祖師の影拝す　京都府　西村句楽坊

太鼓まで鳴らぬ新形秋祭　笠岡市　谷本鈍愚坊

東海道マッチの品川海が見え　大阪市　山田李鳥

弔詞読む代理すらすらよどみなく　八戸市　川村映輝

退職日新しいタイ締めてでる　松原市　守屋万竿

献立の表にさかろう物価高　松江市　岡崎雪美

年金日入歯も白く笑ってる　七尾市　松高秀峰

安全運転向うの方からぶつけられ　大阪市　森川すみれ

幸福というあたたかい部屋に住み　松江市　岡崎祥月

陳情団三日三晩も飲み続け　松江市　内藤喜夫

秋風に空になってる冷蔵庫　大阪市　福富隆子

年末攻勢赤旗の手入をし　金沢市　根上杏花

横文字の方が大きい基地の町　今治市　八塚三五島

手鏡の中の自分に話しかけ　岡山県　梶川信子

赤札の病室が増え秋深し　大阪市　大野修二

あぶなゆな言葉吐き出す娘のドライ　宮崎市　野口卯之助

パパが教えた通りをやって叱られる　鳥取市　近藤昭夫

人並に暮らそうセルを出して着る　岡山県　鳥取周甫

夏やせへスタミナ送る秋の風　愛媛県　村上石峰

美容体操と思うてますとよく動き　大阪市　宮尾あいき

塵のない庭掃く妻の朝が明け　今治市　蔦本昌道

叱られて叱られて随行無事に終え　布施市　古谷まさる

風が無くたらり椰子さえ死んだ　マカベル　上田紅溪

ゴールインのトップを占めた無口者　大阪市　山地判志

酔う程に年輩の腰軽う上げ　泉南長野市　森本黒天子

選挙違反否認が元の検事にて　茨木市　高木繁太郎

落選の候補違反であげられる　兵庫県　森田千里

たおれても非情の大地尚歩む　神戸市　大野木真砂

達の職業、年令、其の置かれている環境などから、十人十色ではないかと思います。

川柳選句の場合、其の選者の柳歴、年令、嗜好、職業などから、作品に対する解釈が違い、従って其の評価が違うという事は元より当然の事であります。この事は毎月号の句評リレーにも見られる事でありまして、作品の解釈や評価が完全に一致する事の方が、却って不自然でおかしい、と思うのであります。

こう考えて来ますと、句会で天に抜けたといっては、鬼の首でも取った様に思い上ったり、没になったといっては、選者をうらんで見たり果ては、川柳を放棄したりするのは全く、馬鹿気た事といえましょう。吹けばとぶような川柳に、ワクワクやクヨクヨは禁物と知るべきであります。

主流派も寝覚めの悪い多数決


コーヒの味

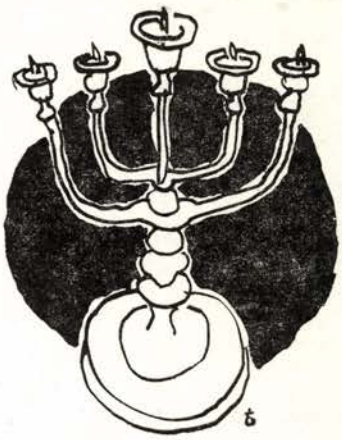
モダン川柳

心斉橋大丸北の辻東へ

御門

TEL(271)6684

御集会には階上御利用下さい



# 川柳 名句と難句

麻生路郎

〔五八五〕

**トラ刈りのようにジャリ船ジャリを採り**

（七面山）

浅い河川や海岸沿いの遠浅で、ジャリ船が底面からジャリをすくい採って行く光景をよく見かける。そのアトは何事もなかったようではあるが、そうではない。澄みきった水面を透して見る水底の面は、まるで散髪のトラ刈りのようなみにくさだと作者は自然のぶちこわしをなげいているのだ。

〔五八六〕

**素晴しい喜劇社長の首が飛び**

（保　美）

馘が飛ぶということは社長としても社員にしても悲劇に違いないがこの句では社長の馘が飛んだのを「素晴しい喜劇」だと詠んでいるので、それは社員側から観ての喜劇と解していいだろう。馘が飛んだ事情は句から窺うことは出来ないが、社長のワンマン振りや常日頃の豪華な生活ぶりに反感を懐いていた社員達から見れば社長の汚職事件か横領事件かに端を発して、詰腹を切らせられたのを「アアいい気味だ、あのワンマン社長の渋面こそ、どんな名優でも演技が出来ないだろう。これこそ素晴しい喜劇だ。」と詠んだのであろう。変ったネライがこの句のヤマだ。

〔五八七〕

**牛歩した疲れか代議士の計報**

（春　巣）

議会で議事の引き延ばし策に牛歩戦術が行われるが、あれぐらいバカバカしい光景はない。

議会中か、議会閉会後まもなく代議士の訃報が伝えられても、世間では悼むどころか「牛歩した疲れか」と、ヤユされたとしたら代議士たるものも立つ瀬があるまい。これぐらい痛烈でしかも皮肉な句は稀である。

〔五八八〕

**未亡人でっかと盃まわって来**

（知恵美）

どっかの宴会での一コマであろう。

「いつもお若いし、美しくていらっしゃるし、どなたかの奥さんとばかし思っていました。そうでっか、未亡人でっか、お子さまが五人もおありなんですって。そうとはとても見えませんわ。長男さん、もう大学を出て、大会社にお勤めで、その方のお嫁さんもおもらいになりましたそうで。それではあなたさまもご安心ですわね」と談は一っこうに途切れそうにもないが、やっとのことに

「あなたお一つ」と盃が回って来たというのである。

「未亡人でっか」が実によく利いて、情景を躍如ならしめている。

〔五八九〕

**退職のまだ顔のきくつもりでい**

（村瀧子）

この句は役所や会社の顔で、料亭などの飲み食いがツケで自由に出来たのを、いつの間にやら自分の顔だと錯覚をしていた人たちの盲点を衝いた面白さがある。払い癖さえよければ、たとえ退職をしても、顧客相手の稼業だけに、役所や会社の顔と自分の顔とを振替えてくれるものだが、「今度持って来る」だの、「もう暫く待ってや」だのの顔は利かなくなるものである。要は人格の問題だ。

大新聞の記者などが大会社の社長などに友達扱いされていたのに、退職と同時に面会さえもしてもらえない例がある。これは大新聞の顔で友人扱いされたのを自分の顔と履き違えていたのである。「まだ顔のきくつもりでい」はそうした人達にとって痛い言葉に違いない。

〔五九〇〕

**育児書の通りに弱い子に仕上げ**

（生々庵）

育児書は愛児を育てるための文法や、地図のようなものである。いかにも合理的で、理想的に書かれてあっても、それだけで

は足りないもののあることを作者は指摘しているのである。それは母親のなみなみならぬ愛情だと思うがどんなものであろう。

おばあさん子が弱いのも愛の過剰からである。インテリの子が必ずしも強い子に育てられていないのもいい証拠だ。「弱い子に仕上げ」は皮肉である。

〔五九一〕

**つとめぐちないのがラジオ盲にかけ**

（谷　水）

近ごろはあまり見かけなくなったが、以前はトランジスターラジオを首にかけて、ブラブラしている若者をよく見かけたものだ。それを勤め口がないのかと見たのも、一つの観方には違いない。写生句として面白いと思う。

〔五九二〕

**雑魚の方が幸福にくらしてた**

（宏　子）

彼は会社では雑魚の方だ。川面を流れるように泳いでいる目高の一群の中の一匹だともいえよう。それでいて、至って健康でピチピチしてしている。朗らかで屈托がない。母や妻の愛情に包まれて、日日をいかにも幸福そうに消している。

彼は雑魚であることを認識していないのかも知れないが、私はそれでいいのだと思う。むしろその方が私には羨ましい境涯だと詠んだ句だ。

〔五九三〕

**さわりだけのお経を頼む七回忌**

（春　巣）

去るものは日日に疎しである。七回忌ともなればお経もあまり長いのではウンザリする。アッサリと、さわりだけやってもらいたいというのである。坊さんも、お布施さえタンマリいただければ異存はないらしい。さわりというのは浄瑠璃で、一曲中他の曲節を挿入した部分の名、他流にさわるの意だそうである。義太夫節ではくどきと称する情緒的、歌謡的部分をさわりといっている。壺坂霊験記の「三つ違いの兄さんというて暮らしているうちに……」の一節や、酒屋の「今ごろは半七さん、どこでどうしてござろうやら……」の一節の如きもの。

この句の場合はお経のエッセンス、つまりええとこだけの意。

〔五九四〕

**ギブアンドテイクで主役ふりつける**

（白　星）

ギブアンドテイクは魚心あれば水心の意にも通じるだろう。映画監督と女優との間にイザコザがよくおこるのも、ギブアンドテイクがうまくいかず、主役を振りつけないのが原因のようにいわれているが、みなみな、そんな監督ばかりでもなかろう。この句の場合は意気投合で主役を振りつけたことを詠んだもの。

〔五九五〕

**内転に坐れば冷えるひざ坊主**

（潤　山）

内職といっても、近ごろは貧乏だから内職をするとは限らない。家庭を守っている妻が、あいた時間を利用して少しでも家庭経済を豊かにしようとする内職もある。そのためか、近ごろでは内職を恥ずかしがる気風がウンと減った。この句はそのどちらであるかはハッキリしないが、寒々とした感じからすれば前者の方に近いのではなかろうか。そうだとすれば障子の破ぶれや、畳のへりが擦り切れているさまも想像されるのである。

〔五九六〕

**辻までは急がぬ足で借りて去に**

（和三郎）

セッパ詰った金を借りに出かけたが、そんな素振りも見せないで、おうように構え込み世間話などを何彼と談じた後で、

「実はいい仕事があるので少し融通をしていただきたい」と申込んだのである。

ところが、

「大したことは出来ないが、それぐらいならお持ち下さい」と、話は案外スラスラと運んだ。ヤレヤレ助ったと思ったが、そんな顔もせず、札束を押しいただくとまもなく辞去した。

そして辻までは悠々と歩を運んだが、辻を曲がるが早いか大急ぎで立ち去ったというのである。ある種の人の心理を巧みにつかんでいると思う。その金の使用目的はこの句には表われていないが、いい仕事に投資される筈の借金でないことだけは確だ。

おわり

＝筆者の言葉＝

長らくご愛読くださった「名句と難句」も本号を以って一と先ず筆を擱くことにした。新春号からは更に筆を新らたにして「川柳　題詠句の鑑賞」を執筆することにしましたので倍旧のご愛読をお願いする。

（路）


お買物の楽しさを贈る

そごうの商品券

東京　大阪　神戸　各店共通

10000円まで

そごう

# 私は斯の如く自句を自釈した

たまに、自分の句を自釈して見ることも興味の湧くことであろうと、ハガキに書ける程度のお答をいただいた。（編集局）

**お休みなさいと言うて女中の顔になり**

正本水客

湯上りの体を藤椅子にたくして暮れてゆく山の端を眺めていると、部屋へ案内したのとは別の女中さんが食事を運んできた。まだ廿才には間のある如何にも田舎田舎した娘である。飲めないビールを一本おあいそに注いで貰っているうちに話がほぐれて、正面に見える山の向う側がH温泉で、そこが自分の生れた土地であることや秋のお祭りのこと、冬の雪のこと、次々と方言をまじえて話してくれる。あい間あい間にコロコロと笑い声がはいる。暫くして野天風呂から帰ると、寝床を敷きにきて、お喋りの続きをしていたが、ふと気がついたように敷居際にきっちり両手を突いて、お休みなさいませと叩頭をした。その顔は一人前の女中さんの顔だった。

〃お休みなさいと言うて女中の顔になり〃

この句は初め、何の苦労もなくスラスラと生れて来たが、女中の顔が分って貰えるかどうか、色々考えてみたが外に言葉が見付からなかった。

**素直なる水の流れをまだ見つめ**

川村好郎

岩間にかかれば木の葉の下もくぐり、水路拡けば悠々と流れ、一旦巌壁に立てば躊躇なく滝となって落ち、灼熱の太陽を浴びれば、反抗も不平もなく水蒸気となって昇天し、冷却すれば腹も立てず愚痴もこぼさず雨となり雪となる。しかも忍従でもあきらめでもなく流るるままに己を清め、魚を生成し、草木を霑し、仲間集まれば電力を起し、岩も千々に砕く。

私はこんな人間になりたい。

**亡き人も踏んだであろう石拾う**

岩崎愛二

わたくしは、不朽洞の中に名を列ねておりますが、これは川柳人だからではなく、路郎先生との永いおつき合いと小生の職業がらこうなったんだと信じております。ですからわたくしは、川柳に関しては素人であるということになります。川柳雑誌社の方々とお知り合いも多くなり、極くたまには句会に出たりするうち、川柳らしきものをものにするようになった。それはいつわらぬ告白です。

能登曽々木海岸にて

**亡き人も踏んだであろう石拾う**

今年春死んだ妻への挽歌です。生前旅して絶賛していた土地へあとから出かけたわたくしのセンチメタリズムです。

**さてきょうも踵の減った靴を穿く**

工藤甲吉

いつの頃の句かは今はっきりしないが、いずれにしてもよほど前の句である。新聞のメシを食って二十八年。そのうち戦前、戦中、戦後と二十年も地方記者をやった私である。その間、何足靴を減らして何千キロ、否、何万キロを走り回ったことになるのか?。ともかくこの句は、その頃の私の溜息でもあったのである。もちろん句のよしあしは別。今はただなつかしい句だ。

**バラ活けて疊の破れ気にしてず**

山川阿茶

この句は私の友人が私の部屋の上敷が破れているのを見て「これ税務署に見といて貰い。税金まけてくれはるわ。翠壺の壺に活けたバラが泣くわ」といわれた時に出来た句です。

私はザックバラン庶民的、野性的な性格の一方貴族的な面も持ち合わせ、キメの細かい点があるかと思うと野放図な処もありアブレが顔負けする程ドライな点もある人間です。この句がドンピシャの様に思われます。

**落第の醍醐味なんか知るまいが**

戸田古方

かくしおおせたいのが人情の自然というもの。不逞くさった私の本性。そんなものまで自慢の材料にして勝ちたい本能。かつて深夜の大道に大あぐらをかいて、取りまく不良のまん中で「ブッセーアミダーキョー」とやった私に一脈通じるものがあります。

**定年が初めて座る床柱**

若林草右

多年こつこつと糞真面目に務めたばっかりに大して出世もせず、社宝だ、生字引だとおだてられてよい気になっているうちに、定年で首。最後の晩餐には初めて床柱の前に座わらされ、お偉方から惜別の美辞麗句を頂だいして僅かの退職金でおさらば。これが今のサラリーマンの終着駅。池田首相の倍増計画も結構だが、物価の値上りは彼等を生活のドン底に追いやる。生きた政治はもっと日蔭まで浸み通らねばならない。

定年退職者を代表して依而如件

**犬が行くルンペンが行**

## く金が行く

### 福井野迷路

犬は裸で歩いても一向構わぬが人間は裸で歩くと直ぐ警官に捕まる。已を得ず古代ギリシャの哲学者ダイオジェネス程度の最下級のルンペンにしてお金のかからぬ着物をきせてみた。そして動物と人間とをつきつめてみた。基督も釈迦も古来東西の哲学者も皆考え抜いたのは人間そのものであった。美装も宝石も動産も不動産も地位も名声も皆野良犬と同様に人間ではなかった。

そこでこれ等三者を必然的に分離せざるを得なくなった。そしてこれ等を現代人の崇敬する順に誠心誠実をもってならべてみたらこの句になった。無論偉いやつ程あとから行くのは角力の土俵入り同様。

## 贅沢は拝む心を忘れさせ

### 中島生々庵

贅沢というは心のおごり、拝むというは謙虚という意味である。人の世のすべては進歩であり、進歩の連続であらねばならぬ。そこに絶対に必要なものは謙虚であると私は確信している。おごりの心が生じた時進歩はとどまり、その瞬間に私の心は退歩に向う。退歩は破滅でさえ意味するのである。わが心の貧しさを素直に悟ることこそわが心の進歩であると思う。聖書や仏典や孔孟の教えや科学の大真理等は勿論のことであるけれども、身近かに仕える恩師、先輩、同僚、ひいては後輩子弟のただずまいに対してさえそのことは真実である。それだのに又しても又しても謙虚が忘れがちとなり、批判や軽視、時とすると嫉妬、蔑視までが頭をもち上げようとする。これが悲しい私の心のなりわいの常である。

しかしそれは私にとって、謂うところの無常観でもなく、無力観でもなく、劣等感でもない。勇しくも逞しい「わが道をゆく」精進の心構えである。ただその勇しさ逞しさには絶対に必要なのが拝む心という裏づけであるというのである。

路郎先生の「ふるくとも僕には仁義礼智信」の名句を私の心の支えとして日暮らしを続けたいのが私の悲願でもあるのである。

## 妻の笑顔そは満足かあきらめか

### 大鶴喜由

句の姿としてはあまりパッとせぬが、内容は味があふれていると思う。

この人と見込んだからには清く美しく添いとげたいと思ったが、毎日顔を突き合せて暮すうち長所も短所も出てくる。女房は思う。他所はカカア天下だが、うちは亭主関白のようだ。これではいかぬと向き直って見たら、ションボリしてしまった。そこで男なら男らしくしなさいと折れた。やっぱり亭主関白の方がいいと思いなおす。亭主は思う。妻はよく笑ってくれるが、あきらめているのか、満足なのか、ひょっとしたら巻かれて巻いている気かもしれない。

そこで私は思う。世間がどういおうが夫婦がその型でよければ、そっとして置きたい。

## 進学した奴に遇うた夜ひと殴る

### 早川清生

自らを語るべき頼もしい句が思い浮ばないのは非常に残念で、進学した奴に遇うた夜ひと殴る

あたりでごかんべん願いたい。もちろんフィクションだが、役所勤めの身の上はいくら意欲と業績があると自負していても、学歴がないことは決定的な欠陥で、そういった機構に対する懐疑と、憤りと、あきらめと、卑下が時として直情径行的な性格の底に常によどんでいて、小ざかしく世渡りしようとする気持に反撥する。決して上乗の句ではなく、社会的な視野からもとらえ得る問題だが、現在の立場と若さと気質の一端とは示していると思う。これを書いて私に自分自身を直接の対象とした句が少い点を改めて認識した。

## 平凡は偉大番茶のお茶柱

### 内藤きさ子

多忙な生活の合間に、ひょっと思い出す一言。「平凡は偉大なり」まことに庶民にとってありがたい古諺だと私は思っている。朝御飯を喰べて一日中くるくると家の中の用事をして夕御飯を喰べて寝る。何でもない事だけどよくよく考えて見れば毎日こうして悪ない行事のくりかえされるのは有難いことなのだ。ホッと一息ついて湯呑についだ番茶に茶柱が立つ。「おや茶柱が立った」などと喜こんだりして一日が暮れてゆく。

平凡な毎日に退屈な方はこの諺を思い出して下さい。

## 二十三で死ぬ気の女名はリカ子

### 林夢虹

先哲の言葉にも、己を知るを以って学とするとあるように、自分を知ると言うことは六つかしいとされています。ようやく二十五才になったばかりの私が、自分の性格について語るのは旨人が象について語るようなものですがあえてそれをなしてみましょう。

先ず私の性格の分析をしてみると、男ばかりの四人兄弟の次男として生れた私は次男的性格、ロマンチズムと少しばかりのセンチメンタル。それと長い間の療養生活による空想癖と心の翳りが合わさって今の私の性格を作ったようです。

作品へは、いわゆる「身がわり体験」と言われる、対象物への感情移入による自己表現が私の作品の特徴のようです。

冒頭の一句から始まる一連の「リカ子」の句は「リカ子」自身は私の変身ではありませんが、一種のアイドルに託して私の〃男〃が一人の〃女〃のタイプを作り出したものと言うことが出来ると思います。

リカ子をある時とあるところに置くとどのように行動し、考え、悩むかは私の心のうつろいと一つのもの言うことが出来ると思います。

〃二十三で死ぬ気の女名はリカ子〃

二十三才で私は死にたいと思いますと、女と言うにはなにかいたいけない一人の女が言った、二十三才が私の死ぬのにふさわしい年だと思いますと……。

その女性の名は〃リカ子〃だと私は思った。いや〃リカ子〃でなければいけないと……。清純な中にも〃女〃を感じさせるリカ子、リカ子は人の世の愁いを知っている。……と私は思った。

# 句集「凡人」を読んで

北川春巣

「凡人」著者 浜田久米雄氏

浜田久米雄氏の句集「凡人」がとうとう出版された。とうとうというのは、昨年の「文化の日」の頃から「来年の文化の日には句集を出版したい」といっておられた由を聞いていたからだ。発行日も昭和三十八年十一月三日と「文化の日」の日付になっている。

久米雄氏の職業は誰も知る国鉄マンである。句集の「あとがき」によれば、昭和二年に国鉄へはいり、今年で勤続三十六年、川柳をはじめたのは昭和八年で、川柳歴三十年という。私が大阪鉄道病院へ就職したのが昭和十三年であるし、私が川柳をはじめたのが昭和九年頃であるから、国鉄でも川柳でも、久米雄氏は私の先輩である。その先輩がいよいよ、とうという個人句集を出版されたのであるから、後輩の私として誠に嬉しいし、誠に喜ばしいしまた羨ましい。後輩の私に句集を読んだ感想を書けとのご指名であるから、お断りもできず、句集をまだ見ておられない人々に紹介をするつもりでペンを取った次第である。

さて、われわれが個人句集を出版する目的は、もちろん「自分の句を一本に纏めて世に問う」という所にあるのであるが、川柳をはじめて五年になる、あるいは十年になるのでその間の作品を集め、更に将来への飛躍の一里塚にしよう、という目的のものもあり、還暦になったのでその記念に一応今までの作品を集めてみよう、というような場合もある。あるいは職場を定年退職するので、句集を出しておこう、というのもあるであろう。また本人の死後「遺句集」というのもある。句集「凡人」の場合は、川柳生活三十年の記念句集ということになっている。川柳生活三十年といえば、その間に作られた句は膨大な数に上るであろう。路郎先生は序文の中に「数千句の中から」といわれ、「あとがき」の中には、著者はその句数は明記していないが、その中から百二十句を自選し、後でまた百句に減らした由である。句集には百句が載っているに過ぎないが、数千句から百句を自選するということはまた大変な仕事で、句の創作以上のエネルギーが必要だったと思うのである。またその上、句集には一頁に一句ずつ載っているのであるが、その句に対して作者の感想や説明が数行ずつ書き込まれている。そのエネルギーがまた大変だったろうと思われるし、またこのような体裁の句集は今までに見たことがない。

句の鑑賞は、作者を離れて、読者がおのがじしすればよい、という議論もあるであろうが、また作者の感想や説明を読むことによって、鑑賞のヒントも得られるわけである。スカタンな解釈をしないですむ、という利点も考えられる。例えば「夏」の部に（一四頁）

強いられた
うどんは
噛んで噛んで喰べ

という句がある。その頁の感想には、「はじめのうちは噛まずにのみ込んでいるうどんではあるが、いくら好物でも定量がある。強いられては困る」とある。こんな感想なら書いて貰わなくても句意はよく分るのであるが、この句が「夏」の部にはいっている所にもう一つヒントを与えて貰っているような気もするのである。俳句の季題には「うどん」というのはないからである。同じく「夏」の部に


酒 清
金露
灘・魚崎
金露酒造合名会社醸


負けてなるものかと
夏の陽を避けず

「戦争中広島時代の作。こんな気持でいたものだが、負けてしまった」と説明がある。句集には暦年的の順序で並べたものもあるが、本句集のような場合、そうでないのだから、作句した背景を書きたい気も起こるのだろう。しかしこの句など、「戦時中の句だ」などという説明はいらないような気がする。

本句集の場合、句の分類は、㈠春、㈡夏、㈢秋、㈣冬、㈤酒、㈥国鉄、㈦身辺句、㈧句会雑誌など、と八部に分けてある。前の「うどん」の句の如く、何故に「夏」なのか分らぬ句もあるにはあるのだが……。

先達て句集出版祝賀会が岡山で行なわれ、私も大阪から参加したが、その折広島から参加された川雑広島支部長石原伯峯氏の祝辞の中に、「自分は広島で久米雄さんから三つのものを学んだ。その一つはもちろん川柳であり、他は謡曲と酒である」といわれていたが、久米雄氏はどこへ転勤されても川柳の師匠であり、謡曲や酒の師匠であったらしい。その点句集には「酒」の部に「酒」の句が十二句（十二%）も採ってあり、しかもこれが名句揃いで、なるほどとうなずける。

常連が
もう来るころの
湯がたぎり

また酒の
とりことなるか

# 金泥集

選乃葭生麻　　「皿具絵」　課題

絵具皿そろえただけで画きもせず　阿茶
絵具皿一つおぼえの菊と蘭　同
次々と来客乾いた絵具皿　同
絵具皿紅し紅葉を画きつづけ　きさ子
絵具皿乾いて巨匠床に臥し　同
才能はどうでも好きで絵具皿　同
絵具皿ぶっちゃけたよな絵がはやり　一栄
ママと子の構想違う絵具皿　同
アトリエを敬遠してる一張羅　同
絵具皿これは入選だなと思い　清子
パレットに秋の色練る子の写生　同
絵具皿を前に正座のインタビュー　同
酷評にめげず悲願の絵具皿　酔夢
絵具皿荒れて画商のよりつかず　同
絵具皿洗うに惜しい色を出し　同
絵具皿ほこりかぶって飲み歩き　美喜
日展へ意欲に燃えた絵具皿　同
絵具皿お供に秋の野をめぐり　同
スケッチは紅黄秋の絵具皿　寿美司
絵具皿かわいたままのかたみなり　同
食器皿絵具をといて主婦の閑　同
絵具皿干からびたまま胸を病み　周甫
絵具皿弟に持たし写生会　同
シャツの流れる部屋で絵具とき　みさ子
絵具皿洗うが如く恋も消え　同

次回題「猫」　〆切　十二月末日

花だより

（句集には、今まで例示したように、句は大抵三行に書いてある。二行のもたまにある。これは路郎先生のよくいわれる「別ち書き」で、句の味読上大切なことと思う）。ところが

終列車
尾灯もすこし
ゆれて着き

という句がある。「終列車は酔いどれ列車。だから尾灯までがふらふらして汽車がとまった」と説明してある。私にはちょっと「酒」だとは分からなかった。説明を読めばまア何とか納得できたが、説明を読まないとこれが「酒」の句であることが分らないのは私一人だろうか。

久米雄氏の句風は、こうして一本に纏ったのを見ると、人生派である。川柳的にいうなれば伝統派である。革新派あるいは詩情派の人が見れば、少したよりなく思うのではあるまいか。

さかづきの
上にも
秋の香がさらり

には、多少の詩情的な所もあるが、

一級酒
恩に着せられ
そうに飲み

などの口調は、全く古川柳的であり、庶民的である。

庶民的であるといえば句集の題の「凡人」がまた嬉しいのである。久米雄氏から直接聞いたわけではないが、この「凡人」という題は、あるいは「身辺句」の部の第一句。

凡人へ
もったいなくも
湯があふれ

から取られたものではないかと思う。これについて路郎先生は序文の中で、「しかし（君が）ただの凡人でないことは、この句集の特異な発表振りを一見すれば、すぐにもうなずきうることであろう。（中略）ここまで来ればたとえ作者が凡人であろうとも、俗人でないことだけは確かだ。非凡人というものは、そうザラにあるものではない。作者が凡人であることを自ら悟るところに幸福の人生のあることを思えば、君のために祝福せざるを得ない」といっておられる。実にその通りで、私もその意見には賛成である。「凡人」という題名こそ、久米雄氏が自らを凡人と悟り切っていることを示すもので、氏の幸福は思うべきである。

ひとさまに
一歩おくれて
行くこころ

下向いて
動めておれば
左遷され

などと、句集には気の弱い凡人ぶりをうたってある。

路郎先生もこのことを意識されたのか「川柳雑誌」十月号の不朽洞句帖に

凡人と自称小さなあきらめか

という句を発表されている。（ただし、これが句集「凡人」に関係があるのかどうか、路郎先生に聞いたわけではないから、これは私の想像に過ぎない）

とまれ、句集「凡人」は久米雄氏を知る者には氏の人物そのものを見るような句集である。氏を知らぬ人には、あるいは少し物足りないかも知れぬと思うが「あとがき」にある久米雄氏の略歴（職歴及び柳歴）を読まれた後でもう一度句を読み直せば、未知の人にも感興をそそるものがあるのではないかと思う。

久米雄氏は、この句集の中には「これが久米雄の句でございますというまずまずの句は二十句しかないと」書いておられるが、十人十色というから、十人の人に好きな句を選ばせたら、あるいは五人の人に好きな句を二十句ずつ選べといったら、その中に句集の中の百句が全部はいってしまうかも知れない。それにしても、祝賀会で石原伯峯氏のいわれた久米雄氏のもう一つの特技である謡曲の句が一句も採られていないことは、久米雄氏の全貌を知ろうとする者にとっては淋しい限りのような気もする。

# 新進作家大いに語る

橘高薫風子
林夢虹

**薫風子**＝こんにちわ。お呼び立てしてどうも。作句のエンジンがまた怪しくなって来たのでね。君と話せば又、ハッスル出来ようと思って。

**夢虹**＝そのようなお役になら何時なりと……。

**薫**＝あなたが川柳をした第一番目の句、いわば処女作はどんなのでした。

**夢**＝それはしっかり覚えていますよ。明和病院で薫風子さんの退院祝いの句会、兼題「夜店」、「夜店の灯消えて星空近くなり」薫風子選で平に抜けました。

**薫**＝そうだったの。僕の退院は昭和三十二年七月の末だった。夢虹という名も僕が名付け親だし、因縁浅からずですね。十一月号の川柳塔に君の「裏切った人の心のわかる秋」があったが、句もこれだけ進歩した訳だ。

読書の秋に読書しましたか。

**夢**＝店番（聖心書房へ勤務）しながら専ら宗教の本を。川柳のは浜田久米雄著「凡人」と「番傘一万句集」。

**薫**＝「凡人」は新しい型で編集された句集で、簡単な説明付きは何だか著者と話をしているような親近感を覚えて効果的だな。百句とは少な過ぎる感じだが粒選りばかりということでこれも一方法かも知れんですね。

**夢**＝三十年一筋の川柳ということで、人生の上でも淡ましさを感じます。番傘の句集の方は。

**薫**＝僕の読み方は少し変ってるんだ。あれを手にして先ず三窓さんの句をずっと探した訳です。まあ、佳句もあるにはあるが、僕の気に入りの句は「綴り方貧しき父は母を打つ」一句だけしかない。句集三文オペラにある、「ストの日の少女嶮しき事を言う」「貧しければ馥郁としてリンゴの香」「泣くによしぎしぎしと鳴る車井戸」「どぶろくにえり子の声を肴とす」「醤油を提げてまったく詩心なし」「大原女にいくさの傷はすこしあり」「実験例3ニッポン国漁夫とあり」「その中の黒い金魚は孤独だな」「印象はうどんのまずい町だった」が皆無。僕の好きな十句の一つだけ見付けたという訳で、三窓さんが番傘誌上には、これらを発表しなかったのか、句集編集委員が採らなかったのか、どちらにしろとにかく僕は「三窓淋しや」と思ったな。

**夢**＝同感。えてしてああいう老大な句集はそういうことになるのでしょうね。関係者の努力は大したものに思いますが。

**薫**＝同感。同感のしあいっこ。（笑）

**夢**＝大丸で開催されていた「芭蕉の生涯展」は見られましたか。私は残念乍ら。

**薫**＝会場でばったり道田葉平氏に会ったりして混雑した人の肩越しに筆跡を見て来ましたよ。書信などの子細は解説書を買って来たが、旅と句で人間を磨いて行った芭蕉の筆は一口にいうと「さむらい」の筆やと思ったな。それから新聞の解説かで読んだが、芭蕉は偉いなと思ったことは、死ぬ間際に「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」の一句を詠み、それが辞世の句となったことは有名だけれど、その少し前に嘗って大井川で詠んだ句を、「清滝や波に散り込む青松葉」の句に替えていることで、死に際まで推敲していた句への執念は立派やと思うたね。

**夢**＝川柳界でそういった大家はおられますか。

**薫**＝芭蕉は行年五十一才やからね。情熱はまだまだ熾烈な年だよ。七十才を越えて八十に近くなっても作句に情熱を持って臨むことはむずかしいことと思う。君や僕なら毒舌した句しか作れないぜ。（笑）

**夢**＝七十を越える長生きが先ず難題ですね。二人ながら。

**薫**＝どう、リカ子さんこの頃元気？（註リカ子は作家夢虹君の胸に住む架空の妖精に似た女性で、彼の作品に屢々出てくる）。

**夢**＝私がこのように元気な時はリカ子も元気です。私は「柳人録」の句にも、「性格を表わしている句」にも、「二十三で死ぬ気の女の名はリカ子」を出したのですが、私自身の最高の句というより、この句は私に作句上の一転機をもたらした意味で忘れられないのです。川柳は人間探究の詩といわれていますが、私はその意味で作品の上に「問題意識」がなければならないと考えていた訳です。その考えは今も変りませんが、その「問題意識」が作品の上に出ていなくても、一人の人間を詠うことによって、「問題」を内に深めて提出することが出来るということに気がついたわけです。そのことによって「ポエジー（詩）」と「イデア（思惟）」との合一が出来るように思うのです。

**薫**＝リカ子を浮彫りにすることにより、「ポエジー」と「イデア」の合一は成程より容易になる訳だ。併し川柳作家としたら、どういう句を創ろうとこの二者の合一が自から出来ているといった境

地にまでならなければ……。そろそろ理論的になって来たので、もう一押しして君の得意な定型擁護論を拝聴しようか。

**夢**＝私は定型擁護ではないのです「朝が来たよと雀が鳴くが二人は死んでいた」という句を到るように、定型に絶大な魅力を持ちながら、そこから少しでも遠い距離に、可能なまでの遠さの距離に離れて見たい気持で一ぱいなんです。

**薫**＝その句などはまだ定型の影や匂いがある。破調だけれど、お父さんが定型のしっかり者でお母さんは自由律といった句はやはり定型だな。だから定型擁護論でいい訳だ。

**夢**＝私は定型詩の定型とは、日本の墨絵・浮世絵の線であり、絵画の輪郭であり、ピカソ・マチス等の作品の豊富な色彩を囲んだ太い線のように思うのです。そこで絵画に於ける線とはどんな意味を持っているのか、を考えて見たいのです。絵には素人の私の独断になるやも知れませんが、現代に生きる私達は、墨絵とか浮世絵をみてもそれに満足の行く実存感を感じることが出来ないのですが、それらが画かれた時代の人達は、「線」で輪郭だけを画かれた人物で充分な「人間」を感じた訳なのです。その原因は、墨絵など

が盛んに画かれた時代の人達の大部分はまだ充分に「個我（自己）」というものに目覚めていなかったのです。その時代の、つまり封建時代の人間観というものは外部から形造られたものだったわけですから、それで、線を主にして画かれた人間を見て、これこそ我々だと無意識のうちに充分な実存感を得たと考えられるわけです。芸術はそれが作られた時代の作者の人間観を表わしていると考えられますからね。この人間の「内なるもの（個我）」と「外なるもの（既成秩序・社会秩序）」とに影響される人間像は古代から現代に至る迄の彫刻・絵画を見てもよくわかると思うのです。時代が新しくなるにつれて、絵画の人間像は輪郭をはっきりと表したものが多くなって来ているのです。それは社会秩序が強化されるにつれて、自己意識よりも外的な抑圧が強くなって、「人間」がだんだん外部から形造られるものとなって来た訳ですね。たとえば日本でも江戸時代初期から中期にかけての武士道の華やかな時代では、武士の人間性などは無視して、武士とはこうあるべきものだとの考えにより、武士というものが造り上げられていった訳なんです。そこで「線」の尊重という古典に対して、「光線」が発見されました。時は、人間が

宗教から解放されたルネッサンスの時代です。それ以後、個我伸展が大いに叫ばれ、その当時の絵画に見られるように人物と周囲との境界が殆んどなく、人物が背景に溶け込んだような絵が多い訳です。個我意識が既成秩序に勝つたと言うわけです。またそれ以後には、ピカソ・マチスのように太い線を使う画家が現れるわけですが、それは一たん個我の勝利と見えたのが、また、個我を抑圧する色々のものが現れて来たからです。ゲルニカなどで判るように。絵画論が長くなりましたが、私がいたいのは、絵の背景と画かれる対象物との境界線の持つ意味なのです。

定型詩の定型はこの線と同じ意味を持つと私は思うのです。日本には近代になるまで自由詩がなく、定型詩があり、西洋には定型詩が少く、自由詩が多いことなども、西洋では早くから個我意識が発達していたためで、日本では本当の個我意識というものは明治末期まで無かったといえるのではないかと思います。まあそういう訳で日本では俳句とか和歌とか川柳が発達したと思うのです。ところで、現代は、また、人間を類型化しようとするメカニズムの中で、自己を圧迫するものが強烈に感じられるのですね。そこで定型短

詩に新しい生命、魅力が出てくるという結論なのです。

**薫**＝十七音字の金縛りが、むしろ、強烈な刺激と目まぐるしい移り変りの現代の文芸にはふさわしいものだというのですね。つまり、苦悩の律としての定型を再認識すべしということ？

**夢**＝そうです。個我意識の極少だった封建時代には逃避としての定型詩の場があったのです。芭蕉も西行もそうです。併し、現代の定型詩は別の意義がなければなりません。昔と同じ逃避の場の定型ではなく、充分に自己意識や社会意識に目覚めた上で、その苦悩する思想・真理を探究・活写する手段として、先にもいった定型が生きてくるというのです。核心を衝いた社会批判や、知的抒情などの深いものを表現する上に、定型を活かせといたいのです。

**薫**＝それも一説だろう。定型擁護論じゃなく定型絶対論になって来た。この辺で話題を

替えよう。

**夢**＝せんば川柳社創刊十五周年記念の大会で「旅」の選をされましたが。

**薫**＝あれに後日譚があるのです。秀句に「旅人に角を切られた鹿が来る　梅柿」という句を選んで、短評に、「鹿」という動物は旅情をそそるものです。石曽根民郎氏が鹿の尻尾に旅ごころを覚えられて一句を成されたことがありましたが、この句、別段、傷心の旅人ととらずとも、立派な句と鑑賞出来るのですが、角を切られた鹿という語から推して、足らぬもの、空ろなもの、淋しい心を抱いての旅だとも思われるのです。角を切られた鹿の哀訴する眼差しと旅愁がぴったり通い合ってあわれを深めています。秀句に選びまし

たといいましたね。その後、あの句は「旅人に角を切られた鹿」と誤った解釈をされそうですねとある人にいわれましてね。僕は、句を散文ととれば、そういう解釈も成り立つが、川柳詩としてのあの句には「旅人に」の次に一呼吸か半呼吸の休止がある。活字にするならば本来なら二行にするところだ。まあ川柳する人なら間違って解釈はしないだろうといったのです。すると、「旅人へ」としたら間違いは絶対に起らぬから良いのではないかというのです。そこで僕は、いや、あれは絶対に「旅人に」でなければならぬ。「へ」なら英語でいえばtoで、「に」なら外面的には英語のbyだ、が内面的心理的にはinの意味合いがあるのだ。「へ」という助詞を川柳界では頻りに、殆んど反省なしに使用しているが、この助詞は非常に曲者なんでね。と、こう説明して解ってもらったのです。助詞一つおろそかには出来ません。作句には勿論鑑賞にもね。

**夢**＝川柳界にはそういう何か、今までの慣例に極めて素直というか従順なところが多いですね。

**薫**＝それでね。夢虹川柳不道徳講座といったものを始めると面白いよ。「『へ』に気を付けろ」とか、「大いに当てこむべし」とか「一日一句の貯金川柳排撃」とか。沢山あるぜ。（笑）

**夢**＝そういう方面なら私の専売特許です。（笑）

**薫**＝随分といい分を持ってるでしょうね。

**夢**＝川柳誌で自選欄とか自選月を設けているところがありますか。

**薫**あるにはあるが少いです。俳界・短歌界ではどうなんでしょうね。自選が充分出来るようになると一人前以上だからね。没句の再登場というのが関の山で、ひどく混乱するという理由からだろうが。

**夢**＝私はこれが欲しいですね。そして、そのままでは益なしですが、その後で、再度の自己批判、相互批判を厳しく持つ訳です。

**薫**＝自選欄の翌月には批判欄を設けるとかいう方法ででもね。柳誌には作家相互の勉強の場がない。句評も評者の弁は出るが、作者の弁はない。まあ書く人が極端に片寄る訳ですね。的外れの評、ひどい評をされても作者はそのまま。改まって書く程でもないという訳で。簡単に物のいえる欄があれば手軽るにいえるんだが……。そういう雰囲気を雑誌に盛り上げることが出来たらね。君なら毎月書くだろう。（笑）　君に、「クリスチャンラッシュに座席とりそこね」という句があったね。

**夢**＝その句は私の一面だけしか出てませんが、私の性格はやはり、キリスト信者としての色合いが強いようですから。私の数少い体験句です。

**薫**＝魚住満潮氏が西成界隈を精力的に詠み続けられているように、君はクリスチャンの立場を活かして精神生活というか、敬虔な世界をもっともっと詠んで見てはどうか今度会ったら提案しようと思っていたのです。

**夢**＝私も、偽悪趣味なのが流行のような、人間の動物的な片面を強調し過ぎる傾向にある文学界、そして又病める現代を一時の過渡的混乱現象だと思っているのです。人生は罪のきずの跡の探究と同様に、美しいもの、キリスト教的な言葉を用いると、原罪以前の人間、つまり、けがれのない人間の状態も探求しなければと思ってますから、そのうちに軌道に乗せます。

**薫**＝川柳家仲間で偽悪的な表現を依然としてもてはやしていると社会一般から取り残されてしまいますからね。悪なら悪でいいのだが、偽悪ということ、装うことは私は好まないのです。

**夢**＝キリスト様も嫌われます。

**薫**＝玉造に建った立派な教会を一度拝見に行きますよ壁画がすばらしいんですってね。

**夢**　また荘厳ミサにお出掛け下さい。

**薫**＝話したいことは尽きないが……。

**夢**＝私もまだまだいいたいことが……。

**薫**＝今日はこの辺で。


★年末年始のご贈答にご利用下さい

あなたの句帖が出来ました

★路郎好みだけに、すばらしく気がきいています。句会でお使いになるなり、抜けた句の整理にお使いになれば、何冊かで、あなたの句集の礎稿が出来ます。又柳友への贈答に句会の賞品にも最適です。是非ご利用下さい。

一冊八〇円（廿送料）

一人一冊素晴らいし句を

橘高薫風子著　麻生路郎序

川柳句集

価250円
送費60円

▼著者は新進作家で、繊細な新感覚の持ち主である。川柳不朽洞会に入って揉まれ、川雑編集部員として精進を続けている前途ある好作家である。

発行所　川柳雑誌社
大阪市住吉区万代西五丁目二五
電話　大阪(671)6081
振替口座大阪七五〇五〇

# 照手姫

冨士野鞍馬

うつくしい相模車へがきをのせ　（傍四）

「相模」といえば、古川柳では淫奔女ということになっている。しかし「美しい相模」というのは、貞女の照手姫をいうのである。照手姫は、相模押領使横山郡司信久の娘で、（当流小栗判官）その夫小栗判官（小次郎助直）は、姫の兄、横山三郎に怨みをうけ、毒酒を呑まされ、餓鬼病になった。藤沢の遊行上人の修法によって命をとりとめた。この説話はいろいろに作られている。照手姫は餓鬼病（半身不随か）の小栗判官を車に乗せて、紀州熊野へ連れて行き、湯の峯温泉で療病させた。

てるて姫小むねのわるい車引き　（万宝十三）

てるてひめ気の無いものを引いて行き　（万安七）

車どめすこぶる困るてるて姫　（タル九八）

と、難行をして、紀州熊野に着いた。

美しい車力熊野のゆ場へ来る　（タル三七）

と詠まれ、

鯨寄る浦まで照手ついて行き　（万安八）

「鯨寄る浦」とは熊野のことで、熊野灘では鯨が捕れた。

へん病が来たとくまので人だかり　（タル一五）

餓鬼病という奇病だから、「人だかり」と大袈裟に詠まれている。

がきやみはとんだ遠くのゆへは入り　（タル一五）

神奈川県から和歌山県まで、車にのせてあるいて行ったのだから大へんであったであろう。

大臣（おとど）とがきとくまのへまいるなり　（万安七）

とも詠まれ、「大臣」とは、平重盛の熊野詣をいうのである。

がき病みの跡はいやだと湯場でいい　（タル二〇）

奇病の小栗判官が入ったあとは、みなきらったであろう。

からさけをせんば煮にするてるてひめ　（拾五）

熊野で療養には、からさけ（干鮭）のようになった小栗判官を、洗馬煮のように温泉へ入れたというのであろう。干鮭というのは、鮭を開いて、屋上又は樹上に投げ上げて、天日晒したもので、補肝、滋腎、増血の薬であるから、干鮭そのものをせんば煮にして食べさせたというのかも知れない。「せんば煮」というのは、塩魚を湯に浸して塩抜きにして味をつけて煮るのである。

相模にはまれな貞女の虎照手　（タル八四）

堅いのが相模女に二人あり　（万安七）

相模女といえば、尻軽と川柳ではきめられているが、曽我十郎の愛人虎御前と、この照手姫の二人は貞女だったと詠んでいる。

貞女の名残る六浦と松浦潟　（タル一二三）

相模金沢六浦に、照手姫が縛られたという松の木がある。「松浦潟」は、夫を恋うて石に化した佐用姫のことである。

今に、照手姫が車を曳いて通ったという「小栗街道」があり、和歌山県には、その通行に奉仕した人々の子孫という村もある。また紀州湯峯温泉の一部に小栗湯というのもあり、伝説は生きている。

りっぱな武士で本宮を出るなり　（タル一五）

小栗判官は、照手姫の丹情と温泉の効で全快して、立派な武士に戻り、本宮の湯峯を立って、遂に敵横山三郎を討ったというのである。

そして照手姫は、夫の死後、剃髪して、藤沢山に入り、名を長照と改めて、夫の追福を祈ったと伝えられている。

今てるてだとふじ沢でくらいこみ　（末三）

一説に照手は、藤沢の遊女であったとも作られているので、藤沢宿の女郎を、それに附会して詠まれている。

小栗判官は三条高倉の大納言兼家の嫡子で、藤沢遊行寺に墓がある。この話は、浄るりや小説でいろいろ作られている。


營業所
阿倍野店
堺店
住吉店
平野店
都島店
蒲生店
十三店
九条店
credit system
買いよい
良い安い
丸越
月賦百貨店

兼題「女」の選句を披講する本社主幹の麻生路郎氏

川柳人一堂に集る

# 大阪文化祭

## 第十五回 川柳大会

主催 大阪市、大阪市教委
関西短詩文学連盟
後援 毎日新聞社

会場 於・毎日新聞社講堂

菊花薫る秋晴れの正に大安吉日であった。中馬大阪市長の胸の白いバラも、この日を象徴していた。

大阪文化祭第十五回川柳大会は十一月十七日（日）正午から毎日新聞社本社講堂で開催されたが、中馬馨大阪市長の挨拶に、十五回重ねて来たこの大会の雰囲気は、一つのピークに達した感があった。選者の充実、投句の増加、会の進行の手際の良さが、この川柳大会の盛り上がりの主であるとするならば経済学博士宮本又次氏の講演と大阪博物館の上田広範氏の解説によるスライド、大阪の歴史古代篇が、錦上花を添えるものであった。誰もが、第十五回を迎えた川柳大会が、ようやく大人になったという感慨を抱いたに違いない。

定刻午後一時、名司会で鳴る西尾栞氏が松江梅里氏を紹介、梅里氏は、「十五年といえば昔なら元服、いわば社会的にも一人立ちする大人になった訳で、これを祝って従来の市と共にさらに府も加わって、この大会を育てて下さることとなった。今日は暦の上でも大安である。慶事の多い秋の佳き日、会場の皆さんと一緒に心から、大阪文化祭第十五回川柳大会を祝福しましょう。」と開会を宣せられた。

次いで、中馬市長は、大阪文化祭第十五回川柳大会の盛会を祝し、年末の選者と当事者の労を述べ、年々、延べ数千句を投句して来る作家の熱を賞し、毎日新聞社の後援の功を多とせられた。そして、川柳の人情の機微・社会批判には常に教えられることが多く、その意を含んで、市政に当るということもあるとのことであった。従来、大阪は商工都市といわれて来た故もあって、文化面は東京と京都に委せた形になっていたが、市長就任以来、情緒ある大大阪市建設を目標に、文化の奨励と街の緑化に意と力を尽くして来たが、川柳作家諸氏の教養と、味わい深い川柳作品とで大阪の文化都市建設達成に協力貢献して戴きたい、と、挨拶され、燃える情熱で大大阪の未来像、いわゆるビジョンを披瀝された。

大阪大学教授、経済学博士宮本正次氏の講演は、江戸時代を中心とした近世の大阪の経済・社会機構について蘊蓄を傾けられての話で、甚だ盛り沢山な興味深いものであって、「ややこしい話ばかりをしたが、ややこしいということが大阪の性格なのだ。」と講演を結ばれた。

大阪博物館の上田広範氏のスライドを追っての古代の大阪に関する話も、又、満場息をのんで傾聴した。大阪近郊に数多く散在する古墳から発掘された遺物の考古学的考証を判り易く解説、祖先の生活や社会機構を推量し、又、目のあたりにして幾度か一同を首肯讃嘆させられた。

○

席題の披講は、「川柳文学」の戸奈巳之介氏の「副業」から始まり、「川柳雑誌」の北川春巣氏の「大安」、若本多久志氏の兼題「こども」と続き、元「天馬」誌主宰の河野春三氏の「人生」の披講となったが、氏は大阪市在住の……

……古高齢の西村句楽坊氏は令嬢付添いで開会前に来場、「昨夜電報を戴きましてな。出席せよとのことですので……。」と半信半疑。結果は路郎先生選「女」で準特選に入賞、満場の拍手で毎日新聞社贈呈のメダルを押し戴いて受けられた。（会場スナップ）

……革新系の第一者でもあり、本大会での初の登場とあって、清新の気を漲らせ、披講前に井上靖氏の詩「人生」を朗読されるなど感銘深いものがあった。次いで「川柳文

お買物は
4都を結ぶ
大丸へ！
大阪・東京
大丸
京都・神戸

学」主幹の堀口塊人氏の「鳩」の披講と特選句準特選句などの短評があったが、披講に先立ち、大阪市長中馬馨氏の来会を得た事と、阪大教授宮本又次氏の大阪についての講演、これらが川柳大会の雰囲気を、発足以来の盛り上げたものにしたのだと思う。加うるに選者に革新派の、立派な著者を持つ河野春三氏を迎えたのも意義を更に深くした、と感想を述べられた。最後に「川柳雑誌」の主幹であり、関西短詩文学連盟の理事長である麻生路郎氏が「大阪文化祭第十五回川柳大会を盛会裡に迎えたが、ようやく大人の句会に成長して来たという感が深い。誠にご願し、来年度の大会を一層隆盛ならしめるよう希望され、大阪文化祭第十五回川柳大会の幕は閉じら

☆山川阿茶さん、路郎先生の兼題「女」の披講にやきもき、隣席の連れに、「今まで披講の兼席題五題は皆入選してますよって、路郎先生のにも安打が出たら十割ですねん。」に連れの柳人、「女らしい顔してはったら入選します。」

（会場スナップ）

☆岸川漣氏は兼題「こども」と席題「大安」の特選に入選、大阪市長賞、教育委員長賞を二つも受賞された。両手に花である。

（会場スナップ）

同慶の至りであると述べられ、兼題「女」の披講に入られた。特選句には不朽洞会長の若手の林夢虹氏が入選され、大会の空気はいやが上に盛り上り、会場のあちこちから喚声が聞かれた。閉会の辞は吉田圭井堂氏、川柳作家の益々の健康、更に健吟ならんことを念

た。（時に五時）

○

各題受賞句を左に

兼題「女」　選者　麻生　路郎

準特選　西村句楽坊

肌着まで男に挑む色に染め

特　選　林　夢虹

女の眼女は敵としてうつり

兼題「鳩」　選者　堀口　塊人

準特選　尾郷　明水

校庭に鳩が遊んでいる遅刻

特　選　西川　安静

鳩に豆やったお宮で式をあげ

大阪文化祭川柳大会に於て大阪の未来像を語る

**中馬市長**

本年は従来通り、五句特選句に大阪市長賞、教育委員長賞が授賞された外に、準特選句には毎日新聞社から記念メダルが贈呈され

兼題「人生」選者　河野　春三

準特選　今西　生薑

気まぐれな神人生へ胡椒ふる

☆河相すゝむ氏・林夢虹氏・橘高薫風氏はそれぞれ、「副業」「女」「人生」で特選の金的を射て川雑明和病院支部のため万丈の気を吐かれ、指導の西尾栄氏から祝福されていた。夢虹氏は二度、薫風子氏は三度目の受賞。

（会場スナップ）

特　選　橘高薫風子

人生薄暮　空より降りし奴凧の顔

兼題「こども」選者　若本多久志

準特選　福井　竜昭

自家用車こどもも同じ夢を持ち

特　選　岸川　漣

日曜のこどもに済まぬ手内職

兼題「大安」選者　北川　春巣

準特選　魚住　満潮

大安だなあ花嫁の荷が続き

特　選　岸川　漣

大安の酒血圧もいうとれず

兼題「副業」選者　戸奈巳之介

準特選　副業の方で電話が欲しくなり　黒川　紫香

特　選　近頃は妻も本気にやる小店　河相すゝむ

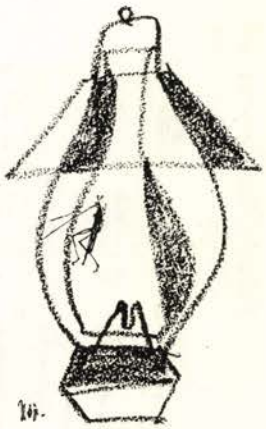
## ―懇親宴―

大会終了後、午後五時半から毎日新聞大阪本社西側のニュー近鉄グリルで、有志で懇親宴を開催。盛会裡に無事終了した一日を反省、将来の発展協力を誓って乾杯した。席上、西藤寿太郎社会教育部長が立たれて、次のような挨拶があった。「私は第八回までの本大会のお世話をした後、今回の十五回まで全くのご無沙汰でありました。本日、市長が出席したのも、十五回に亘っての歴史を積み重ねて来られた皆さんの熱意のいたすところと、委員諸氏の並々ならぬお骨折りが結実したのに外なりません。殊に本大会全体の企画が、参加者総てに好感を与えられたことは非常なものがありました。大阪の古代と近世を専門家の講演などによって紹介し、現代を作家諸氏の川柳そのもので、又、未来図を市長が抱負として申し上げた。誠に十五回を記念するにふさわしい有意義な会でありました」と挨拶をされた。懇親宴出席者五十名の拍手には来るべき年の大会への希望にあふれていた。

（橘高薫風子記）

# 一路集

選者
土井文蝶
長野井操蛙
高橋子



## ウインク

土井文蝶選

街娼のウインク財布を打診する　静波
低気圧ウインクどころかそっぽ向き　秀峰
ウインクもできず内心燃えあがり　圭水
ウインクも野暮な男で聞き返えし　涼人
ウインクが左瞳に似てるひげっ面　万芋
肩越しのウインクで客つなぎ止め　どんたく
ウインクで今日のデイトをきめている　判志
朝の鏡ウィンクを返して来　むじな
ウインクを返えしビールをつぎこぼし　九呂平
ウインクで別れを惜しむテープ持ち　雪美
人妻を射るウインクの凄い腕　祥月
十代のウインク四十をとまどわせ　静水
ウインクで釣付けにして酌ぎに来ず　宗太郎
ウインクして次のデートを確かめる　雄声
ウインクをして連れ込みのわなにかけ　半月
小道がはしいウインク母にだけ　初甫
ウインクで子分動かすサングラス　同
パフに胡麻化してウィンクを送る　八九寸
恋ごころウインクだけで意を解し　酔夢
ウインクをすればオスと返事をし　雄々
ウインクに応える僕のもう一人　光道
すが目をばウインクと見た阿呆らしさ　光郎
テニスでの瞳は今もお双方　専翁
ウインクに負けて多情を買い被り　専翁
ウインクをされたと二三人思い　和三郎
ウインクの顔へキッスをかるく投げ　句楽坊
ウインクのテスト監督ダメを出し　季鳥
ウインクを冷やかに見る嫁き遅れ　代仕男
催促に目が物をいう夫婦仲　千里
ふところが淋しウインクそらしとく　可住
ウインクへ見当違いが会釈する　初甫
こっそりと送る色目が澄みきって　萩路
ウインクの安売をするドサまわり　淀月
ウインクと口笛二人の恋進む　藤波
ウインクに引張られてる大男　千翁
二階から招ねく目付が只ならず　宗義
ウインクとウィンク通勤車にきられ　同
ウインクで釣ってマダムの抜めなし　杏花
ウインクのききめ社を出て二人連れ　隆子
転んでもウインクしてるお人形　旭峯
ウインクをされて勘定間違える　卯之助
ウインクが姑の肩をうまく越し　生薑
ウインクの効き目ホステス名指しされ　同
バスガイドバックミラーにウインクし　不酔
ウインクと媚態でかせぐナンバーワン　滋雀
こわいウインク百万両をかちとられ　照子
ダッコさんウインクしたまま見すてられ　畑蘭坊
おねだりの汐どき片目つぶりあい　恵二朗
ウインクのおまけみたいに投げキッス　同
満員車ウインク背伸びして返し　十九平
ウインクへ年頃らしい目のやりば　鶴丸
ウインクを誤信なさった慌て様　周甫

## 新鮮

長野井蛙選

新鮮味机の向を替えただけ　暁明
新鮮なムードの仲の新家庭　弘朗
エプロンの白さが匂う新世帯　どんたく
新鮮な空気がおいしいピクニック　鶴丸
新鮮な空気がうまい山の宿　静水
新鮮な朝の空気を犬と出る　香鳥
新鮮な空気を吸うて土に生き　藤波
新鮮な空気を吸ってペタル踏む　祥月
新鮮を求めて週末露を踏む　恵二朗
汽車の窓せまる緑の風を入れ　寿美司
新鮮な空気へふれに途中下車　桂仙
満員車降りて空気の味を知り　和三郎
新鮮な水と空気に泊りがけ　むじな
新鮮な空気が良いと言う病　宗義
病みぬいて新鮮な空気ありがたし　石峰
新鮮な空気にむせる病み上り　晃男
新鮮な血を貰い受け生きかえり　半月
新鮮な田舎もバイクの排気ガス　圭水
新鮮な空気へ海から陽が昇り　卯之助
新鮮な野菜とろけるような味　雪美
新鮮と見せる野菜へ水を打ち　萩路

新鮮を求めて朝の市場籠　保夫
新鮮に見せる八百屋は水をかけ　初甫
新鮮な野菜スイスイ売れてゆき　秀峰
新鮮な野菜の山で市場明け　旭峯
新鮮な野菜に飢える物価高　万竿
新鮮な野菜で土も付けて買い　千翁
新鮮な果物十六七が売りに来る　勝子
新鮮な果実を持って師を見舞い　十九平
新鮮な果実の芯に虫が住み　句楽坊
新鮮な松茸味覚の秋にする　初甫
新鮮な松茸値段言うていず　雄声
新鮮な牛乳牧場へ来てよばれ　大八州
産みたての卵見舞に提げて行き　旭峯
朝市に新鮮競ふ声が張り　辰始
新鮮な間に八百屋元をとり　藤波
新鮮なムードで明ける魚市場　愛鳩
魚屋の電気で見せる新鮮さ　滋雀
魚屋の手鍵跳ねてるように見せ　九呂平
魚屋の声も鮮度をプラスする　圭井堂
生け魚で呑む大漁の祝い酒　専翁
看板に鮮魚とあって鯛がはね　光郎
新鮮な庭へ緋鯉が跳ねてくれ　雄声
新鮮なさんまバイクで届く村　光道
ひるあみの声でいわしの走り売り　隆子
釣り上げた魚を刺身の舟の月　生薑
新鮮さ失せて後妻の口掛り　杏花

（佳）

新鮮な二人の瞳に愛の星　弥生
セーラーにつっみきれない胸を張り　万竿
新鮮な牛乳曝日が明日のもの　孝風
新鮮さ取り得に海の見える箸　和三郎
魚屋に尋ねば今まで生きて居り　涼人
当選へピチ〳〵動く鯛が着き　愛鳩

（人）

いま池に跳ねてた鯉の洗い出る　八九寸

（地）

まだぬくい受験の朝の生たまご　走道

（天）

マスカットの一つ一つのつぶらな目　生薑

## 和服

### 高橋操子選

女医さんの和服お見それしてました　暁明
六帖をきものの海にして迷い　どんたく
折角の和服台なし娘の外輪　繁太郎
人形と同じ柄だが引きたたず　圭水
性格を和服がこうも落ちつかせ　同
運動会袴をからげて子と走り　万竿
舞台衣裳一回切りの藤娘　孝風
退職をした父和服の日が続き　秀峰
くつろいだ和服一家の夜の集い　祥月
和服でも正座の出来ぬ娘なり　すみれ
PTAやっぱり和服で来てた母　九呂平
病み上り和服の妻が美しい　静水
親善の大役果して来た和服　雄声
ぎこちなく娘和服で茶をはこび　宗太郎
お転婆を晴着が包む大鼓帯　桂仙
PTA古い着物を出してみる　酔夢
白足袋の神経使う畳縁　八九寸
スカートのようには和服歩かれず　雄々
年頃が和服洋服手古摺らせ　弥生
白足袋のコハぜきっちり旅仕度　初甫
和服着た娘めっきり大人めき　光道
振袖へ日本の姿取りもどし　柳瓢子
今年こそ来年こそと訪問着　圭井堂
和服着た師匠の腰がピンと立ち　保夫
すれ違う女の和服値踏する　李鳥
休日を訪えば和服で花鋏　代仕男
常会の上座はみんな和服なり　千里
和服着た女房変った人に見え　たけお
和服着の勤めと女みくびられ　専翁
まだ月賦すまぬ見合の訪問着　光郎
披露宴和服の椅子は国の叔父　和三郎
名取りから和服で通し芸に生き　句楽坊
博多帯ポンとたたいた締め心地　初甫
左褄男嫌いのばちさばき　勝子
大鵬の和服姿へ片思い　萩路
汚れてもよいテトロンの訪問着　淀月
外人にキモノの袖をつままれる　晃男
お太鼓が結べて和服好きになり　千翁
床柱和服のひざが気にかかり　宗義
向い風和服の裾が気に掛り　杏花
化繊だとわかって和服値踏され　静波
先生のゆかたに会うた夏祭り　大八洲
集金へマダムは地味な和服着る　旭峯
せまくとも我が家和服がくつろがせ　生薑
今日和裁明日洋裁の嫁ぐ前　滋雀
和服ショウモデルに似合う柄ばかり　照子
祝宴の和服が何かやりそうな　弘朗
花嫁のかつらが重い色直し　灯蘭坊
犯人は和服羽織の紐が落ち　十九平
和服着て来た日の姉が姉に見え　恵二朗
割り切って見ても和服を捨て切れず　むじな
一ツ身へ親馬鹿ムダな金をかけ　同

秀句

衣裳脱ぎ舞妓は旅のハイヒール　隆史
紋付を着てライターの入れどころ　涼人
和服着てもらう長寿の赤い杖　藤波
胎動にさからわぬまま帯を〆め　九呂平
太鼓橋和服が好きといいそうな　暁明

忘年会には
あたたかいすき焼と鍋料理
もみじの名所
竜田大橋下車
電話竜田一六二
料理は一流値は三流
酌は有芸仲居揃い
竹青の店

# 柳界展望

**生々庵の初舞台**

大阪道頓堀の朝日座（元文楽座）で花柳芳吾さんの櫻吾会公演に出演した我社顧主幹の中島生々庵氏の長唄「助六」の演技（十月廿七日）

## 句会

▼本社師走句会は六日（金）午後五時から千日前電停前、自安寺で開催。句会後引き続同会場で恒例の忘年懇親宴が行なわれる。柳友お誘い合わせの上多数のご出席をお願いする。▼南区医師会文化部杏林川柳句会（大阪市）は十一月二十七日（水）午後七時から南区三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。▼七面短詩文学クラブ（和歌山市）川柳部句会は十一月二十日（水）午後六時から奥新和歌浦魚又楼で開催。▼南海電鉄句会（大阪市）は十一月二十一日（木）午後六時から難波親和クラブで開催。▼コクヨ川柳会（大阪市）十一月句会は十二月十三日（金）に延期された。

▼大阪逓信病院川柳句会は十一月三十日（土）午後二時から北館五館会議室で開催。▼大阪文化祭第十五回川柳大会は十一月十七日（日）正午から毎日新聞大阪本社講堂で開催。中馬大阪市長の挨拶があった。▼堺市文化祭川柳大会は十一月二十四日（日）午後一時から大小路の大阪府立労働会館で開催。主催は川雑堺支部。以上路郎主幹出席。▼文化祭参加岸和田市民川柳大会は十月二十七日（日）午後〇時半から市民会館二階和室で開催。▼第六回天鉄局管内川柳大会兼天王寺川柳会十五周年記念大会（大阪市）は十月二十七日（日）午前十時から天王寺駅二階議会室で開催。▼昭和三十七年度不浪人賞入選句は「聞いてやるだけの力になってやり」と決定、蝶五郎賞は小林不浪人句碑建立委員会が受賞した。▼第十回記念北陸川柳大会（金沢市）は十月二十七日正午から瓢箪町公民館で開催。

▼川柳はこだて百五十号記念道内吟社対抗川柳誌上大会の兼題は忙中閑・門違い・邪魔・馴染・朝の顔・振返る・無責任・花道・背伸び・逢える日・根比べ・怖い目、各題二句。投句は百円封入の上十二月三十一日迄に函館市青柳町十七函館川柳社宛。▼大山竹二一周忌追悼句会は十一月九日（土）午後五時半から神戸三宮生田神社神徳殿で開催。▼第十七回岩手芸術祭参加川柳大会は十月二十日午前十時から盛岡市八幡宮斉館で開催。▼路郎主幹は十月二十七日午後二時から城東区のすみれ文化会で川柳講演をされた。

## 消息

▼路郎主幹は十一月三日午後一時からフォスティバルホールで開催された、大阪文化祭祝典、昭和三十八年度大阪文化賞・大阪芸術賞贈呈式に臨席された。▼中島生々庵氏（大阪市）は十月二十七日朝日座での大阪文化祭参加桜吾会舞踊公演に出演、長唄「助六」を舞われ、初舞台ながら好評を博された。▼土井文蝶氏（大阪市）は高津病院に入院胃の手術を受けられたが経過は極めて良好で十一月下旬には退院されるとのこと。▼中島紫痴郎氏（長野県）から句集「行く水」も路郎先生の序文にて花を添えていただき美事に出来上りましたことを厚くお礼申し上げます。奥様、紅葉は僅かに里山だけとなりましたがスキーは如何ですとの来信があった。▼田垣方大氏（倉敷市）は十一月九日から十三日まで二年遅れの銀婚旅行に日光、鎌倉方面を廻遊、夫人の手をひっぱって鎌倉八幡宮の石段を昇った時は半分ぐらい恥かしかったと。「陽明門妻若やいだ声になり」▼福島鉄児氏（門真市）は十八年ぶりに再び大阪に出て、今後はすっかり職も変え、月給取りの一年生に生れ変りましたが、大阪は故里のこととて嬉しい限り、十一月十日のせんば十五週年大会で生々庵師と薫風子さんにお目にかかりましたと。▼野村味平氏（加賀市）は十月三十一日四ヵ月の療養生活に別れを告げて退院、引続き自宅加療しておられるが、住居が国道と県道の三叉路にあたるので雷族に悩まされていられるそうだが、医師の言葉からして勤めに出られる日も近いとのこと。▼工藤甲吉氏（青森市）は湯河原温泉における会議に出張の往復、東海道線の列車から横須賀線の鶴見事故現場を見、静かで陽が当って何事もなかったようで、いのちの大切さをしみじみ考えさせられましたと。「惨事跡ケロリと花が立つばかり」▼福田丁路氏（高槻市）は十一月三日大阪の南端海辺の小島住吉に口先の釣天狗ばかりで遊び、「磯の香に酔うて白砂に腰を据え」と句信を寄せられた。▼阿部佐保蘭氏（東京都）は家業の最盛期の暇を見つけては、近刊の句集「鶴の姿」の校正に励んでおられる。▼本多柳志・西川晃両氏（大阪市）は十月二十九日詩情を求めて秋色濃い湖北を探訪、彦根城からの比良・伊吹の眺めに堪能された。「めし喰えば琵琶湖の風が茶を冷し」▼河相すゝむ氏（西宮市）は十一月三、四、五日と社用で東京へ、六日は山梨大学を訪問、七日からは岡山、小豆島へと極めて多忙。本郷の書店で古書を入手したのが望外のよろこびであったと。▼山内静水氏（竹原市）の奔走で市教委主催の文化祭行事川柳の部も盛会裡に終了した由。▼北川春巣氏（大阪市）は十月二十七日、浜田久米雄句集「凡人」発刊祝賀句会に、冨岡淡舟氏、児島与呂志氏らを帯同して出席、岡山の柳人と交歓された。▼森本法

泉子氏（鳥取市）の夫人は十月十五日入院後十ヵ月目に念願の手術を受け、神経の回復には長期を要するものの経過は順調であるとのこと。速かなるご全快をお祈り申し上げる。▼杉本一鶴氏（貝塚市）は療養生活十五年目を迎えられて、ひたすら神の慈愛にすがっておられる由。▼丸尾潮花氏（高槻市）は十一月十七日大阪桜橋サンケイホールで、若柳流の名取若柳潮花として初の舞台を長唄「島の千歳」で飾られた。路郎師から花輪を贈られ異彩を放った。▼川岡霊眼氏（諫早市）は博多の近くの夜須町主婦の会の後援で人生相談と公民館で「霊学から見た家庭の人」と題する講演会を持たれた。▼梶川蘇堂氏（神戸市）は十一月五日から出張で亘子へ。暇を見て城ヶ島を見物。「城ヶ島唄の通りに雨が降り」の句信を寄せられた。▼万代句念坊氏（大阪市）は近来身体が老化して来たのかてんと元気がなくて困っておりますが、二、三の友人に川柳をすすめて川柳を楽しんでおりますと。「孫二人太いと細い月の影」▼西辻竹青氏（奈良県）は十月二十三日、永平寺から片山津に遊ばれ、善光寺から戸倉へ巡遊された。「老杉の値段も付けたり永平寺」▼中島生々庵氏（大阪市）は十一月十六日から所用で空路高知へ。川雑土佐支部の川竹松風支部長、沢柳翠氏、竹崎寛氏らと歓談された。▼吉原紅月氏（高砂市）は第七回全国鉄川柳大会で第四位の成績を収められた。

### 柳書・句集

▼山村祐著「続短詩私論」が一九六三年十月二十五日東京都豊島区巣鴨六ノ一三二九森林書房から発行された。序に、将来新しい定型成立の予感は絶無とはいえぬまでも、少くともそのためにはリズムと観念構成との新しい「型」を示す必要がある。とか、従来の定型を乗越えてゆかぬことには、新しい創造方法は決して生まれてこぬとの考え方に到達するのである。とかの語がこの書の性格を表わしている。B6版百九十頁。定価五百円。▼浜田久米雄著句集「凡人」が昭和三十八年十一月三日大阪市住吉区万代西五丁目二五川柳雑誌社から出版された。麻生路郎主幹の序に、吹けば飛ぶよな将棋のコマにその一生を打ち込む人もあれば、僅か十七音字にその半生を惜しみなく浸る人もある。浜田久米雄君は岡山県の産だが三十年という永い歳月を国鉄一路で頑張り続けているし、趣味も又柳歴三十年を数え少しも倦むことを知らない。とある。「功績章汽笛のなかを歩いて来」鉄道生活三十年、もうろく章をもらった日のいつわらざる心境だ。といったように句に短文が添えてある。B6版百十一頁、定価三百円、送料五十円。▼中島紫痴郎著「行く水」が昭和三十八年十月二十日長野県山ノ内町湯田中温泉三〇八六ノ二「行く水」刊行会から刊行された。明治三十九年「川柳とへなぶり」へ入ってから現在まで五十七年、その間の句文集で、麻生路郎・三上三太郎・岸本水府・金子呑風・岡田甫諸氏の序文と自序がある。B6版二百十七頁、非売品。▼類題別番傘川柳一万句集が昭和三十八年十月一日、大阪市北区樋上町四五創元社から初版発行された。B6版横綴五百三十八頁、定価八百五十円。▼ながや類題句集（川柳長屋第十一集）が昭和三十八年十月二十日東京都中央区日本橋人形町三ノ四川柳長屋連から発行された。B6版横綴九十頁、定価百五十円、送料三十円。▼安川久留美百句選が昭和三十八年八月二十四日、富山市千歳町四一番傘えんぴつ川柳社から発行された。定価百円。▼川崎銀甲著句集「しろがね」が昭和三十八年八月二十四日富山市千歳町四一番傘えんぴつ川柳社から発行された。定価百円。▼第十四回名古屋短詩型文学祭作品集が十月十四日、名古屋短詩文学連盟から発行された。定価五十円。

### 慶　弔

▼西尾栞氏（八尾市）の次女玲子さんは十月十九日、阪口繁三氏夫妻の媒酌で柏原市役所勤務巳波弘幸氏と結婚された。お慶び申し上げる。▼河相すゝむ氏（西宮市）の長女恵美子さんは十月十七日、重谷仁士氏と結婚、宝塚ホテルで華燭の典を挙げられた。お慶び申し上げる。▼林宏子さん（大阪市）の長女節子さんが、西出甚吉氏夫妻の媒酌で三木輝夫氏と十一月十四日華燭の典を挙げられた。仲人の夫人一栄さんも、宏子さんも女流作家として知られている。▼久家代仕男氏夫人（平田市）が去る十月二十二日に永眠された。謹んでご冥福を祈る。

### 電話番号変更

▼太田良子さん（大阪市）の自宅の電話番号が変更になった。六九二局一九二五番。


年末年始のご贈答にご利用下さい

風流 人間横丁
東野大八著
B6型　二五八頁
価 250円
送費70円

★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックバランな人生批判が、その雄筆からほとばしるさまは凄い。まるで腕の冴えた板場の切れ味にも似ている。
★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

川柳 親ごころ子心
若本多久志著　麻生路郎序
価 150円
送費50円

「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳樽の中から親ごころ子心を詠った秀句を多年に亘って根気よく拾い蒐めたのが本書である。登載された柳人三百余名、集句二千余は親と子の愛情が如何に深いものであるかを知ることの出来る実に有意義な書である。

★ご送金は振替口座をご利用が便利で安全です。（切手代用可）

発行所　大阪市住吉局区内 万代西5丁目25
川柳雑誌社
振替口座 大阪75050
電話 大阪 (61) 6081

# 明治大正柳誌巡礼

奥津啓一朗

□

明治四十一年（一九〇八）六月十日、川柳とへなぶり、第二巻第六号、七月号にて、明治三十八年十一月創刊、同四十年「滑稽文学」と改題云々と書いたのは誤りにて、高須晴三氏より左の御懇切なる御教示がありましたので訂正します。

「滑稽文学」第一巻第一号は、明治四十年一月一日発行。編集兼発行人は田能村梅志。発行所は東京市本郷区湯島天神町一ノ百、滑稽文学社、菊判五二頁、八銭五厘。

同第五号より　編集、発行人を窪田幸太郎に、発行所を牛込区揚場町一三、と改め、発行日も十日となる。菊判六二頁、十一銭。

「川柳とへなぶり」第一巻第八号、第一頁に『滑稽文学』の改題である、「改題の辞」があり、明治四十年八月十日発行。菊五〇、十一銭。

結局明治四十年一月一日『滑稽文学』創刊、同年八月「川柳とへなぶり」一の八となり云々とし、「川柳とへなぶり」（第一次）明治三十九年十一月三日創刊（三十八年は誤り）、二号にて終る、は切離して考えるべきでした。

□

大正九年（一九二〇）八月廿五日、川柳栗　第壱巻第参号、菊判共表紙八頁、東京市浅草区向柳原町一ノ八川柳栗吟社発行、編集発行人岡野栗坊（豊三郎）、非売品。

切れ話染々女覗き込み　岡野　栗坊
榎田珍竹林
鈴虫を好きな女の膝で聴き　伊藤　雨月
測量師寝床の中で地図を書き　藤田　栗丸
面白くない日が続く腹違い　三浦太郎丸
頭割りおんぶで来たを言い募り

大正九年六月創刊（未見）、第七号（大正十年一月廿五日刊）は〈栗川柳〉と改題している。

同人は三浦太郎丸、岡野栗坊、榎田珍竹林、藤田栗丸、加藤一若、伊藤雨月、乙部百栗、顧問村田鯛坊。

雑詠渡辺みはる選、募集吟寺井小尺一選（蚊）、渡辺みはる選（幕）、句会報等が載っている。

九月一日、楊柳、第四号、菊判廿四頁、大阪市泉北郡大津町大字宇多大津二百四番屋敷小島方楊柳吟社発行、編集発行人小島市松、一部拾五銭。

藤原游二郎

ひとすみのあおそらから柿が落ちてきました　美川泥之助
一疋の鮎に病人機嫌よし　斉藤　松窓
涸かぜなし松原つづき炎天なる　杉本　赤魚
長火鉢丁度風呂銭だけ残り　麻生　路郎
金もたぬはゆったり天の川を見る　神島左太坊
死ぬ前に告があったという子の蚊帳青し　木村半文銭
苦しければ寝ていよとの日射し　渡辺雨三昧
一番星を見付けた児の矜　美川芙美女
潮の平かなれど寂しかり　美川登久坊
麻の葉の帯半ばほど闇に浮き　美川登久坊

麻生路郎（先輩無用論の前提）美川登久坊（柳壇先輩無用論）一家吟（雑詠）課題吟井上剣花坊選（権威）松村柳珍堂選（運命）川上日車選（希望）外に楊柳句評等が載っている。（河相すすむ氏蔵）

〈川柳史講話〉には、大正八年には、日車、柳珍堂を主体とする楊柳吟社が組織されて云々とあるのみ、創刊年月日休刊月等御示教を乞う。

## 飛・燕・往・来

### ☆福井野迷路氏より（大阪市）

—路郎宛

拝啓　段々冷えてきましたがお変りございませんか。さて先般来先生に紹介申上げました木野三菱坊老師が急逝致しました。柳の中に先生宛らしき手紙のかきかけがありましたのでお送り致します。一寸読んでやって下さい。老後を先生御指導の元に川柳に打込む積りだったらしいです。末筆乍ら菅乃先生へよろしく。　啓具

十一月一日

福井野迷路

路郎先生侍史

謹啓　深まって行く秋ながら毎日暖かい小春日和が続き、先生益々御元気の事と喜ばしく存じ上げます。

不躾ながら申上げます事を御許し下さい。私生れて七十余年の今日まで、川柳を楽しなんか夢にも思った事もありませんでした。医者という、凡そ文学芸術から程遠い俗務（？）の忙しさがそうさせた事も理由の一つでもありますが、若い時から、趣味といえば囲碁一途で御座いました。然し、碁には相手が必要だし、一人で定石を並べていても結構楽しみはありますが、矢張り勝負をせねば意義もなく、打てば勝たねばとなるのが当然です。処が寄る年と共に勝負は、頭にも体にも次第に疲労を覚えるのが甚しくなりました。それで、師匠井上因碩先生の没後すっかり石を手にせず、何か独りで楽しめるものはないかと思っていた矢先き、畏友福井野迷路君にそそのかされて九月の川柳忌句会に席を汚がし、同君から先生にも紹介もせられました。

見渡すと、意外にも多数のお隼まり、然かも皆ベテラン揃いのようで最初から気遅れを感じましたが勇気を奪い、兼題、席題とも出して見ました処、計らずも駄句四句が選に入り、お情とは気付きながら、そこは人間の弱さ、何となく嬉しい様な恥かしい様な気で帰りました。調子づいて十月の句会も顔を出しましたが、まんまと凡てが没になり、矢張りまぐれ当りはいつでもあるものでないという原則を悟り、寧ろこれが当然だと思いました。だが、川柳とは一体どんどんなものか、私自身では、皮肉、諷刺、洒落、ユーモアを取入れて十七文字にまとめた、ただそれ丈けのものと思っておりました。従って一茶の「親のない雀」にしても「やせ蛙」にしても、俳句か川柳かを疑ったのでした。

そこで、現代柳人といわれる人達の句を知り度い為、先生の「新川柳鑑賞」を送って貰って読んで見て、フーンと溜息をつき、併せて先生の解説句評に自然頭が下り、愈々川柳なるもののむずかしさ、深さを、朧気ながら読取ることを得ました事を改めて感謝致す次第で御座います。今後の句会でも、天・地・人の二、三句だけでも先生の句評を聞かせて頂けば幸いこの上もありません。

これからも毎月句会に出て川柳を楽しみたい——

この新参者初心者が尤も永年鍛えられたベテランと肩を並べようなどと、大それた考えは毛頭ありません。店を愚息に譲り、隠居部屋を建て、見ざる、聞かざる、の三猿舎と名付けて、徒然を川柳で楽しまんとする軽い望に外なりませんが、それでも勉強する丈けは怠らない積りです。

只私は喘息の気味で、冬の寒さが最も禁物で御座いまして十一月までは何とかと思いますが、それから先き来春四月頃は残念ながら、道は遠し、夜間でもあり、多分先生に接し得ないと思われますのが残念で御座います。

時分柄（手紙はここで終っている。林三猿坊氏は行年七十四才。産婦人科医。）

第百五十三回

大萬川柳

# 「ケタ違い」

入選発表

選者　麻生路郎先生
投句総数　五百三十二句
入選　四十五句

松原　万竿
つまみ食いさすがお役所ケタ違い

大阪　市郎
そこそこにあしらわれてると知らぬへボ

大阪　弘村
ご門を這入ってからの遠いこと

京都　八九寸
ケタ違いしてるおえはんをもてこまし

神戸　どんたく
ケタ違いこうも舞台がひきしまり

大阪　保夫
ケタ違いでもデパートは出して見せ

岡山　周甫
ケタ違い素面素小手であしらわれ

大阪　野菜
ケタ違い母のへそくり追っつかず

豊中　多久志
前科二十犯へチンピラかしこまり

大阪　あいき
ケタ違いじゃないかとそろばんでぶたれ

大阪　生薑
ケタ違うアイディア社長が屬目し

笠岡　真奇
現実に戻ればわが身養子なり

笠岡　桃里
坊っちゃまの子を堕ろさして暇を出し

岡山　十九平
さすが老舗負債の額もケタ違い

大阪　良
もう君と呼べないところまで出世

倉敷　方大
ケタ違いとは大げさなお世辞なり

大阪　春巣
ケタ違いの話に酒がまずくなり

神戸　静馬
ゼロ一つ見落し指輪あきらめる

大阪　阿茶
話半分にきいてもケタが違うなり

大阪　水客
レジャーとは言うてもケタがちと違い

大阪　晃
ケタ違い鬪らんといておくれやす

大阪　柳志
宝くじ一ケタ違い持ち歩き

大阪　ゆきを
ケタ違い値踏みした手をひっこめる

ケタ違い思わず密輸モンでっか

仙台　光道
ボーナスもあるにはあるがケタ違い
煙吐く汽車見おろして空の旅

加賀　光郎
汚職からくらしのケタが派手になり
暇と金ケタが違うた菊の出来

大阪　薫風子
あの帯とこの帯しめと値が同じ
ケタ違いの女に惚れた十八九

笠岡　白梅子
玄関でおじけついてるケタ違い
ニコヨンガ眤っと見つめる自家用車

児島　恵二朗
投げられてやっとわかったケタ違い
太っ腹酔いっぷりまでケタ違い

大阪　梅里
日を同じうして語るべからず烏鷺の敵
ケタ違いフンフンフンと聞いていや
ケタ違いおとといいとあしらわれ

五客

大阪　ゆきを
ケタ違いイミテーションでない光り

豊中　多久志
ケタ違いこっちはペタル踏んでゆき

笠岡　桃里
介添えが袖をひいてるケタ違い

堺　圭井堂
包ませて一ケタ違うたともいえず

大阪　柳志
アメリカへ来て知らされたケタ違い

大阪　小松園
難魚どもは相手にはせぬふところ手

（地）　大阪　良
ケタ違いだった実弾が射たパッチ

（天）　大阪　晃
億のつくゼニの話に退屈し

大萬川柳ベストテン（十一月現在）

一　梅里　二四、五　大阪
二　薫風子　二三、〇　大阪
三　方大　一六、五、倉敷
四　好郎　一五、五　泉北
五　水客　一四、〇　大阪
六　晃　一三、五　大阪
七　柳志　一三、〇　大阪
八　遠二　一二、〇　笠岡
九　恵二朗　一二、〇　児島
一〇　東岸　一一、五　岡山
一一　文蝶　一一、五　大阪
一二　良　一一、〇　大阪
一三　素郎　一一、〇　堺
一四　阿茶　一〇、五　大阪
一五　圭井堂　一〇、五　堺
一六　野迷路　九、〇　大阪
一七　静馬　八、五　神戸
一八　きさ子　八、〇　岸和田
一九　春巣　八、〇　大阪
二〇　宗太郎　七、五　石川
以下略

次ぎの兼題「麻薬」五句以内
〆切　十二月十五日
発表　十二月二十日

一月の予告「美少年」
〆切　一月十五日
発表　一日二十日

投句先
大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇
大萬川柳會


—著名作家の川柳句集—

新刊

浜田久米雄著　麻生路郎序

★本句集の著者浜田久米雄氏は岡山の産。多年不朽洞会員として又国鉄川柳人として古豪の名をほしいままにしている。三十余年の柳歴を飾る数千句中より百句を自選し、各句に感想を附して世に問うもの。
★六〇〇部限定版につきご註文はお早く。
★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。（切手代用可）

定価300円
送費50円

大阪市住吉局区内万代西5丁目25
発行所　川柳雑誌社
電話大阪(6081)振替口座大阪75050

いのちある句を創れ

# 花地物壇

**投稿規定**
▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月十五日▼投稿先本社宛

## 本社 十一月句会（大阪市）

11月8日　午後6時
会場――　千日前 自安寺

立冬の日、それは暦の上だけで、柳道にいそしむ者の恵まれた寒からぬこの日に集い来て路郎師の久方振りの柳話「穿ちや心境句その他の句の巾について」多数の例句を挙げて談され、最後に選とは如何なるものか、選の方法ならびに意義を説かれた。満場粛然として静聴した。

本夕の不朽洞杯は努力のベテラン作家静馬氏の獲得するところとなり、十年無欠席の精進振りを遺憾なく発揮された。

（八）

出席者――路郎、夢紅、薫風子、生々庵、柳志、圭井堂、野菜、静馬、千代、多久志、白溪子、好郎、珠笑、いさむ、仲字呂、〆女、清人、白柳、幸雄、句楽坊、専翁、たつみ、文秋、水京、一舟、一栄、清子、あいき、弥生、舟遊、進之助、二郎、梅里、秀子、明子、庸祐、柳宏子、八郎、宏子。

**兼題「無責任」　中島生々庵 選**

無責任時代なんぞとうそぶけり　阿茶
無責任に産んだ子供に養われ　どんたく
誤ちをいい逃れする術を持ち　喜仙
あべこべをおしえて置いておかしがり　宗義
総辞職無責任時代のしめくくり　みさ子
落選のポスターそのまま雨ざらし　八九寸
長男が何んやと責任さける腹　清子
無責任三日坊主の出納帳　白柳
御招待しておき乍ら主人留守　圭井堂
全責任持つと無責任いい放ち　あいき
人づてのそのままはめて見合させ　珠笑
責任と別新楽のコマーシャル　進之助
無責任な返事聞く方も気にしてず　柳宏子
無責任どうし家裁の世話になり　仲字呂
鍵かけて留守番何処かへ出て居らず　静馬
ごねどくへ皆んな黙って無責任　たつみ
野次るだけ野次って賛否の席にいず　白溪子
法律にふれぬ程度の無責任　清人
儲けたらよいんだエロもグロも売り　文秋
無責任やないかと他人のことはいい　柳宏子
無責任なようだが俺は俺のこと　多久志
噂まき散らしてあとは知らぬ顔　文秋
ことづかった折詰どこかへ忘れて来　圭井堂
失策は酒にして置く無責任　柳志
酒追加させとき勘定には眠り　珠笑
無責任な立場の人の意見聞き　白溪子
無責任なすり合うてる事故現場　仲字呂
ちゃっかりと逃げ道もあり無責任　柳宏子
無責任神も仏も知らん顔　いさむ
無責任とばっちりが来て払わされ　白溪子
無責任はかくあるべしと選挙戦　生々庵

**兼題「すねる」　西尾栞 選**

すねて見る相手のほしい置炬燵　阿茶
すね得はさせない父の眼鏡ごし　六竜子
世をすねた孤独の自我に尚すねて　生萱
すねられて呉服売場へ引きかえし　どんたく
託児所で覚えて来たはすねること　一ン十
すねてみた世間にもある善意の灯　幸雄
おしっこも言えぬにすねるすべ覚え　一栄
すねる妬く泣いてはねだる手も覚え　柳志
拒否権をすねてるように扱われ　圭井堂
仲人が聞けばすねてるだけのこと　一舟
すねたので心がすむとは女の気　句楽坊
すねているつもり老妻の茶番めき　生々庵
女五十まだまだすねる手を使い　多久志
人事課にすねてる肚を見すかされ　清人
押入ですねてる腹の虫がなき　白柳
すねることすら忘れてる倦怠期　八郎
すねられて女は強きものと知り　多久志
二号にはすねられ女房には妬かれ　好郎
口げんかすねても灰皿そっとおき　明子
知恵熱が出てから拗ねることも知り　柳宏子
末っ子がすねて年寄り口を出し　白溪子
すねている末座で突飛な黒田節　舟遊
すねられてインスタントを喰べされ　静馬
すねてなんかいません欲求不満です　栞

**兼題「古都」　川村好郎 選**

古都へ来て暫し史中の人となり　高志
奈良京都ガイド歴史の中の人　進之助
古都はよしネオンの色に消されても　たつみ
トラックの音から古都も目を覚まし　文秋
おんなげき大仏さまは背に耐える　生々庵
古都らしい面影わずか裏通り　幸雄
古都よりも生徒にネオン魅力なり　静馬
楽焼へ大仏の鐘またひびき　栞
興亡の歴史をよそに古都の池　多久志
古都かなし都大路のパチンコ屋　栞
伝説の中で文化に生きる古都　梅里
候補者のマイク金閣寺へも叫び　栞
嬌声が古都の風情をぶちこわし　柳宏子
雪月花シーズンオフの知らぬ古都　梅里
余生をば古都を尋ねる老夫婦　いさむ
この辺が都の跡か落葉踏む　圭井堂
古都のよさバスで廻って気がつかず　白溪子
美辞麗句古都を讃えるバスに揺れ　梅里
千年の古都にも温泉マーク建ち　瓢太
さざなみとさくらが変らぬだけの古都　宗義
天平の栄華もむかし古都しずか　水京
学究の興味つないだだけの古都　珠笑
保守的といわれてもよし古都が好き　一舟
康成の目で見て歩く古都の秋　夢虹
地名だけ古都のなごりを残してい　珠笑
裏通り古都の名残りの鬼瓦　柳宏子
商魂は古都も史蹟も何のその　瓢太
永遠の精神も遺る古都の跡　専翁
古都のさび虫ばむようにビルが建ち　好郎

**兼題「長尻」　本多柳志 選**

長尻へ子守り託して市場籠　生萱
時の記念日長尻もしてられず　みさ子
長尻の訳がわかった十二月　宗義
長尻が早々帰る気味悪さ　隆子
長尻今日の日課を考える　判志
三べんもトイレに立ってまだ座り　清人
長尻のわりに仲居へ手が鳴らず　静馬
飼い猫の癖も喋舌って引き取らず　八九寸
長尻が絡んで屋台客が減り　白溪子
長尻の客へ隣室掃きはじめ　静馬
長尻へ電話が鳴ったタイミング　栞
昼時に来て夕飯で腰を上げ　文秋
長尻のまた振出へ来る話題　珠笑
長尻の客と見ぬいた蒸タオル　進之助
長尻へ毛糸編む手を休ませず　一栄
長尻に立てた箒を見つけられ　多久志
長尻の客にとまどう台所　仲字呂

長尻のこうも話題を持ちあわせ　舟遊
飼猫が膝にのぼった長っ尻　夢虹
応援はまだ本論に程遠く　圭井堂
長尻の癖がここでも赤電話　生々庵
トイレから座り直してまだいる気　柳志

**席題「悪友」**　松江梅里選

悪友の誘はすぐに気が揃い　仲字呂
悪友も今日は紋付着る日から　進之助
むしろその悪友なのは俺なんだ　八郎
言い訳を互にたのむ友が出来　泉北
悪友にこどもいちばんよくなっき　静馬
悪友がいっち親身になってくれ　柳宏子
悪友に仕込まれたらしい酒の量　多久志
お互いに悪友になりのみ歩き　甫祐
病気見舞悪友一本さげて来る　水京
お見舞に来た悪友が見直され　白溪子
再会へ悪友の頃なつかしみ　文秋
お互いが悪友だった裏話し　圭井堂
悪友を妻も頼りにしてるなり　珠笑
悪友として奥さんへ初名乗り　進之助
親友が悪友にされ酒肴にされ　泉北
悪友に皆押しつけていつづける　圭井堂
悪友の電話へ留守を使うとき　一栄
妻の留守ねらって悪友やって来る　千代
本心を悪友だけが知ってくれ　珠笑
悪友の名も借り兼ねる程に借り　一舟
悪友はつけの利くとこ二三持ち　野菜
土産場に来て悪友の智恵を借り　いさむ
悪友の酒に善人助けられ　たつみ
十二月悪友ぶりも目にあまり　薫風子
悪友になって詫まる戸を叩き　好郎
催促もせぬ悪友にはげまされ　梅里

**席題「待つ身」**　金井文秋選

相思相愛晴れて挙式へ指を折り　進之助
無事だった安堵が待つ身いうて泣き　珠笑
いまいまし待つ身へ犬がほえてくる　一栄
めしも食わず待ってた妻がなつかしい　静馬
待つ身より待たせる方にあるあせり　柳志
精神修養のつもりという待つ身　水京
めし食つて寝間で待ってる倦怠期　静馬
好きな人待てば人の眼多すぎる　静馬
待たされて伝言板の世話になり　圭井堂
好きだからいつも待つ身の側になり　白溪子
待つ身になれと集金座り込み　泉北
待たされて待つ身にさきぬ程にこたえ　圭井堂
時すでにすぎて待つ身へ小雨降る　仲字呂
待たすだけ待たして断りの電話　栞
先輩が待つ身になっている落目　白溪子
やぶ入りへあれもしといたろこれもしといたろ　清子
顔見たらすが待つ身の愚痴も出ず　梅里
猪を待つ鉄砲へ霜が立ち　柳志
金を借る弱身じりじり待たされる　柳宏子
ハガキ一枚待つ身になってほしいなり　白柳
時計が狂っていたとは待っ身あほらしく　生々庵
予定日が過ぎたと腹にいったとて　珠笑

**席題「物好き」**　橘高薫風子選

物好きが独りで世話をやいてくれ　柳宏子
物好きがいるからへちゃも売れて行き　文秋
物好きないい齢をしてふんな娘と　八郎
物好きな男と知って頼まれる　甫祐
物好きを笑ってる間に式を挙げ　珠笑
物好きなまた捨て猫を拾ろてくる　梅里
物好きと笑えば笑え寒詣り　好郎
物好きが次のニュースを探してる　清子
物好きがトップでのぞく板囲い　清人
物好きと言われていてもいてくる　甫祐
物好きなのを世話人に一人入れ　柳宏子
物好きが飲み屋のつけをことづかり　千代
物好きに大福餅の食べ競べ　圭井堂
物好きの世話がとどいて喜ばれ　白溪子
物好きな旦那はんやなあと惚れている　生々庵
物好きが背伸びして迄のせき込み　幸雄
物好きのさすがに話題豊富なり　清子
物好きと言われ雅号二つもち　進之助
地図ですする旅を物好きなと言われ　たつみ
物好きが梅田へ茶漬喰いに行き　柳志
物好きが愛玩用にブルドック　進之助
物好きが過ぎてゲテモノ食される　舟遊
物好きでしてる貧乏のように見られ　一舟
街録のテレビへ物好き写っとり　梅里
物好きが寄り集ってるドサ廻り　幸雄
物好きな奴だったが支那で死に　夢紅
物好きでなし禿げるとは知らず嫁た　薫風子

## 雑川　阿倍野支部句会（大阪市）

金井文秋報

桁はずれだとは十代思うてず　良
すき腹をこらえごはんはすみました　静馬
気にしない〈予感にいいきかせ　恒明
早耳をかくして愚痴を聞いてやり　好郎
はらいせに戸樋の落口あちら向け　小松園
呼鈴が厭な予感と一致する　柳宏子
割かんへ紅一点は桁外し　一栄
嫌やな予感しますと二号帰さぬ気　市郎
すき腹でかえって来たら妻は留守　梅里
金策のとっくにすき腹通り越し　生薑
早耳の嘘が取り持つ二人仲　野菜
迷うた挙句すき腹で出席す　白柳
すかたんなとこを先輩かぼてくれ　清子
まだ靴を脱がんうちからおい飯や　晃
早耳が責任とらぬ噂まき　文秋
阿呆くそてじっと顔見る桁外れ　八郎
はらいせの棒ぎれ花の首をはね　東天紅
へとへとで飯屋見つけりや休みなり　悦子
早耳のニュースで今日の昼休み　専翁
病む母の予感神秘な力秘め　洋敏
頭痛持ち雨の予感がよく当り　井平
ふと予感大穴あてる気で出かけ　水京
子の抵抗すき腹かかえて寝てしまい　弥生
臭覚のとぎすまされて腹がへり　悪太郎
親バカはすかたんしてもほめている　紫水
すかたんは自慢じゃないがナンバーワン　つる子
すき腹が隣のおかずかぎ分ける　あいき
早耳が気になることをつけて去に　宗義
すき腹に景色は食ってからのこと　圭井堂
すかたんばかり血筋の子沢山　藤内

## 雑川　玉造支部句会（大阪市）

西出一栄報

式にゆく娘より親父が落ちつかず　井平
衝動をこぶしで押えた部長室　水京
ぶちまける相手がなくて手が震え　白柳
候補者が演説前の咳払い　正明
咳払いを合図に野次が乱れ飛び　城東
咳払いをして先ず野次馬をとり静め　幸雄

食品と原資材機械包装の総合誌
食品と科学
Food Science
本社　大阪市北区源蔵町5 (361)9373代
支局　東京都千代田区神田鍛冶町2 (291)9629代
名古屋市昭和区村田町2 (88)9069

咳払いざんげ話の腰を折り　正彦
折込みをたたみかさねる余生なり　寿美司
新聞にライバル同志折り込まれ　珠笑
三面を見るまで折込み放っとかれ　良
二日目は便りに追われハネムーン　生薑
旅に寝て妻の愛情かみしめる　八郎
老いた母夢見が悪いとハガキが来　国雄
出府した夢は破れて帰る汽車　句楽坊
カーテンはこの色にしてと嫁く日待つ　秀子
堕ちるだけ堕ちてあれもこれも夢　六竜子
夢にまで見る母なのに無沙汰勝ち　清子
初めから親子の夢が違っていた　一栄
夢よもう一度一杯のんだくさなり　柳宏子
夢の中でよろめきましたが気にかかり　あいき
おそわれた夢で雑魚寝をみな起こし　文秋
夢を追う夫へ妻は母のごと　一舟

川雑　**京都支部句会**（京都市）
田中烏雀報

下駄を手に少年が向ってくる　礫
道行きは捨身の恋へ花盛り　和三郎
埴輪かけ歴史の捨身にじませる　枯粒
時雨にも近頃みけんに皺の癖　烏雀
東山時雨れて二人の入るとこ　王石
時雨の道を古書再見という本買って帰る　白史
顔洗ってる間に名案が消えてゆき　尚平
天国へ行く名案に同意せず　生薑
朝の名案便所から出て行く　司郎
豆腐汁へ聖人飽きたとも言えず　如洲
妻を呼ぶ時聖人鈴を振り給い　ゆきら
聖人が歩く足元蠢動く　豊次
香水を変える女のうきしずみ　紫蘭
香水とわきががむせるラッシュアワー　句楽坊

川雑　**ハワイ支部句会**（ハワイ）
築山快夢起報

退屈の近所歩きは嫌がられ　平八郎
退屈の不平欠伸で生返事　平八郎
退屈を言訳にして遊んでる　柳葉
退屈も忘れ我子の歌を待っ　拝山
雨やどり退屈そうに時をきき　静杉
停年の若さに退屈つきまとい　笑有
完備して退屈にする保障法　紅渓
会長に祭りあげられ退屈し　暁舟
世智辛い世に退屈もしておらず　浅太
退屈な老人犬にも話しかけ　カロ女
擽ったい夢を抱いて退屈し　峯園
神妙に説教きいてる退屈さ　魔花麗
退屈の欠伸を猫が真似てをり　快夢起
退屈と思うひまなし孫の守　あき坊
退屈へ空を怨んで雨の宿　泉水

川雑　**備前支部句会**（岡山県）
横山一声報

秋しのびよったか酒の味が良し　久米雄
御先祖の名前をもらう子沢山　秋月
秋まつり去年の酔を肩にし　宗義
かすれ字の句集へ疲れた眼をとじる　賤女
新宅で見る星空のすばらしさ　のぶ子
やりくりをせいと家計簿見て呉れず　良江
形見とは言わず指輪をくれた母　あやめ
病む母のはそさは秋の蚊にも似て　東岸
机上では解けないことを祖父はとき　卓郎
経験がたっぷりあってやり損じ　斧九郎
経験の奥儀を愛弟子に教え　芝月
やぶ医者の経験たびたび殺しかけ　伊久野
経験をつんで古狸とあだなされ　愛
十分の飛行経験鼻にかけ　照路
経験を言いはる姑の面にくし　静子
串柿の数程経験つん美でいず　枝子
経験を古いセンスと批判され　胡風
経験がしぶとい女にしてしまい　浄美
経験を話せば時代が違います　一声

川雑　**木次支部句会**（島根県）
藤井明朗報

一人見る月夜淋しい山の宿　昌
別れ来て月夜の影を振りかえり　明朗
ちょっとだけ二人に曇りたい月夜　和幸
稲かけも終り月夜の冴えわたり　清泉
ネオン背に月夜の土手の千鳥足　鶏生
七五三商魂名前覚えて来　勇
七五三ママも着物が一つふえ　正二
紐おとし可愛い笑顔が通りすぎ　清嵐子

川雑　**宇部支部句会**（宇部市）
津秋六花報

シグナルが青でも左右見て通り　誠
シグナルの赤恨めしく乗り遅れ　月想
シグナルへよい子が並んで青を待ち　万年青
停電を交通巡査が手で捌き　羊歳
シグナルの赤へうかつな単車が出　南風
シグナルの役目を妻がして平和　盤茶
シグナルの通りに盲人右に折れ　実男
赤信号つけて待ってる午前二時　東村
人生のシグナル青は点かぬまま　山峰
シグナルが二つに見える二日酔　てる子
ダンプカー信号あろうがなかろうが　わか子
シグナルが変り尾行者慌わて　弘道
お急ぎであろうと信号停止と出　半休
信号の赤をへべれけ知っていた　六花

川雑　**出雲支部句会**（出雲市）
尼緑之助報

急用にして借金を断わる気　独仙
頃合いもよし急用の電話口　岬月
志恋に破れてからのこと　李朋
この頃の不運も天の志　牡
急用にフンフン碁盤は寄せに入り　重信
急用のマイクで派手に呼び出され　澄水
人前を無理に飾った寄付の金　正治
無理をせぬ性が出世にひっかかり　治
急用があると言いつつ打つ碁石　雅行
セールスの無理な笑も板につき　健太郎
無理をした二人が降りる玉造　緑之助

川雑　**土佐支部句会**（高知市）
川竹松風報

独身の頃の手紙にある末練　竹比呂
恋文を見たら破れと書き添える　古城
あて字だらけそれでもうれしい母の文　寅一
運動会ニコヨンの母見てくれず　義夫
表情のないを悲しむ父の遺影　利子
さりげない表情ぐいと打診され　天花
友達の一人一人違った髪の形　美智
一人娘を嫁がせ夫婦に広い家　勝子

色紙短冊
書画用品
大阪成びし筆
丹青堂
電話 ㊐ ㊐㊐

分校の教師となって貰い風呂　俊一郎
儲けたらくれる話へ礼を言い　蟠蛇
風呂を出た裸と入りに来た裸　呑洋
忘れている庭に南天の実が赤い　寛
この人も風呂敷だなあと仲居聞く　松風
景色より彼女を撮りに来たカメラ　喜代
絶景へヒルムが足らぬのを悔い　翠川
祖父はまだ候文で来る手紙　勝喜
妻の座をすて桃色の記事になり　未遂

## 大阪逓信病院川柳会（大阪市）

橋本幸男報

耳たぶも化粧して旦那待つている　史葉
耳よりな話もちかけ貸してくれ　敏行
耳かじりそうに内緒話する　愛論
門がまえだけで寄付金見積られ　宏子
門外不出虫に喰われたままで蔵　没食子
貰いもの名刺をとれば名刺が出　草石
大きさに敬意表した貰いもの　みのる
清貧に置く場所もない貰いもの　竹青
箸一本で立っているようなハイヒール　春雄
靴すべり今度はいつだとただされる　竹荘
お尻ふりふりハイヒールで出勤し　ハナ子
新調の靴夕立ちが気にかかり　せい子
京詣で靴を片手の里の母　文子
遠足のズックが白い一年生　小柳

＊　＊　＊

洋室の窓鉢植をおいて撮り　没食子
洋間ごちゃ〳〵赤ちゃん出来てから　宏子
名曲に聞き惚れ紅茶冷えている　竹荘
名曲として軍艦マーチ世に残り　竹青
名曲を酒と煙の中で聞き　敏行
古賀さんも泣くだろ妻のおネギ節　享
ベートベン招待席は株話　草右
建増しの洋間へ新婚組を入れ　愛論
ギ音係り両手の皿をすり合せ　風仙洞
会合の度に母家で借るお皿　幸男
名曲に勝る夜泣のふえの音　まさる

## コクヨ川柳会（大阪市）

川口理休報

この春も親の面子が受験する　理休
酔うまねを子がして面子まるつぶれ　昭一
面子などかまっておれすのれんおし　広彦
立替えてもらった麻雀馬鹿につき　広彦
立替のつもりが深く感謝され　広彦
立替のつもりが友にしてやられ　理休
死亡ゼロの旗立つ街に出勤し　瑳己
ゼロ地帯ここにもわいろの種が生え　理休
差引きを雰にしとくと煙にまき　昭一

## 南海電鉄川柳会（大阪市）

辻　圭水報

契約の満期待たずに借出され　句念坊
バイブルが神の契約書とも言い　専翁
契約は二の次腹でものを言い　八郎
半金を握らぬ契約不安心　句念坊
契約の期間女優もなやまされ　宏子
契約を延ばしてスバイ送り込み　和郎
先代のえらさが分る契約書　圭水
契約がすむが早いか飲む話　路郎

## あすなろ川柳会（大阪市）

山本素郎報

しのびよる秋へ詩情をそえる虫　梅里
ごまかしの上手の手から水がもれ　志郎
ごまかして問われて答がふたつ出る　信重
反抗期親の出方をジッと見る　慶之助
仲秋のデートに月が明るすぎ　武男
事もなく二百十日の虫すだく　百酒
働いて返す涙に欺かれ　恵美子
働き手揃う一家の波立たず　酔泉
虫の音に秋深まりぬ深まりぬ　幸児
ごまかして逃げたとたんに人をはね　水邦
ごまかしてみたが小心もどしとき　尤三
母子して灯を恋う虫を逃げまわり　福郎
男の子のぼれ滝にも早瀬にも　ゆきを
大阪へ働きにきて朱に染まり　素郎

## 富柳会句報（富田林市）

阿部柳太報

スピード過ぎ安全週間うらぎられ　かずえ
乗れませぬ安全保障の無い車　まさる
安全と思ったカミソリ顔をきり　笑照
身の上を偽り医者になり済まし　静林庵
身の上をかくし合うてる釜ヶ崎　摩天郎
身の上を聞かずも知れる身のこなし　吉太郎
身の上がどうのこうのと嫁いじり　半月
身の上を聞いてる方が泣いており　花梢
月見酒月の裏など気にしてず　清子
丸い月若い二人に笑いかけ　菊代
道頓堀河に満月教えられ　一栄
いい月にそっといい仲うちあよる　栄一郎
満月にアイラブユーが明るすぎ　美代
商売柄したウインクが尾をひいて　八郎
ウインクを隣りと知らず悦に入り　柳太

## 諫早川柳会（諫早市）

川岡霊眼子報

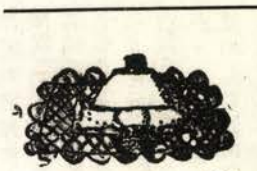
夢見ればいつも故里父母のこと　随心
故里で無理な大番振舞し　嘉象
散歩する海の向うがおらが里　茶人
わが家は蓮根掘になる故郷　美寿栄
父想う故里があり旅遠く　さわの
故里はのぼった樹がある幼なき　良隆
ハイヒール危くあるく里の路　タツエ
故里はよきもの蜜柑なる畠　一男
故里を出る子へ明日の夢をかけ　和子
故里はビルの谷間にある旧家　佐和子
田と山とかこみ故里水うまし　霊眼子

## 明和病院支部句会（西宮市）

雑川　樋口舟遊報

美智子妃も旅立つ顔になり給い　薫風子
健康的な顔で校歌を合唱し　菁風
その旅の果てなる宿の女面　新子
破顔一笑大臣記者を煙にまく　すゝむ
女の子顔のみにくさ知っている　千尋
次の世を信じる母に彼岸来る　正祐
休火山忘れた頃に鳴動し　大丘子
溶岩ものともせずに草がのび　梅志
地元民火山を見つめる目がうつろ　弦月
だまってる訳をみんなに尋ねられ　六竜子
むっつりと食べば黙って飯をつぎ　曙蝶
萩の紅心に残る田舎道　民子
萩咲いて朝夕秋の匂いする　舟遊
無縁仏野生の花が咲いている　泰
萩の散るこの鐘楼に鐘がなし　三司
蛙の子蛙の音痴声がかれ　照児

宴会・出張パーティ・折詰弁当
梅里ノ店
大萬
料亭　阿倍野区松崎町三ノ一〇
TEL（六三）三九三五番
鮨の店　アベノ橋近映地下食通街
TEL（六三）〇一四七番
串の店　南区貴屋町三ツ寺センター
TEL（三一）九一八四番



# 柳樽室

★今夏の川雑川柳祭から引き続いて秋の関西短詩文学連盟の第六回作品展、それに大阪文化祭の第十五回川柳大会と息をつぐ暇もない忙がしさの下半期だった。★ことしは台風のお見舞はうけなかったが、春の知事選、市長選、それに秋の衆院選とあわただしい日が続いて歳末を迎えた。もうこれでお終いかと思っている矢先へ、米大統領ケネディ氏の暗殺事件が惹起した。コレは私の人生観を変えさせるほどのショッキングなものだった。★それに比べると柳界は無風状態だといってもいいほど静けさだった。とはいっても全く進展しなかったという意味ではない。柳書や句集が数に於ても、内容に於ても、いままでにない躍進振りを見せている。★各地の柳誌も皆それぞれに努力のアトが見えるが柳人年齢が相当に高率を示しているので出来るだけ新人層の拡大を計ってもらいたいと思う。★古川柳研究はいたって地味な仕事だが、決して好よいことだと思う。★それと同時に短詩特に川柳に関する革新的な意見の発表があった場合、毛嫌いしないで、つとめて味読して、反論があれば、反論を寄せていただきたい。近く山村祐氏が「続短詩私論」を刊行されたが、柳人は挙って読んでもらいたい。

事家に任かしておけばいいという仕事ではない。本年はこの方面の躍進振りも目立って来て該当者があればその作品や柳歴や写真などを添えて編集局宛にいただきたい。★本誌前号が十日も遅刊したのは四十年来これが初めてだが愛読者の皆様に大変ご迷惑をかけ恐縮している。これは印刷部の主軸になっている人が入院されたためで本誌にとっては大打撃だったが、患者に対しては衷心から同情すべきであるから、何分のご寛恕が願いたい。その点から見て今後の刊行についても多少のズレはあると思うが、今暫くご辛抱をお願いする。私自身は昼夜兼行、文字通り寝食を忘れて働いて挽回につとめていることをご報告申し上げる。★歳末に際し、各位がご健康でよき新春をお迎えになられんことをお祈りしてペンを擱く。（路）

眼を通す価値は充分だとここから提灯持をしておく。★本誌も、新春と共に少しく編集方針を改めたいと思って腐心している。この際編集上に関していろんなご注文を出してもらいたい。いいものはドシドシ断行する。★本誌では又地方的に隠れた作家や若い野心的な意欲のある作家の紹介にもつとめたいと思っているので該当者があればその作品や柳歴や写真などを添えて編集局宛にいただきたい。★本誌前

川柳雑誌社主催

## 本社新春句会

日時　一月七日（火）午後六時
会場　自安寺（妙見さん）
南区千日前電停東スグ北側
電話(211)一四七八番
兼題　「天気晴朗」三句　中島生々庵選
「振出し」三句　菊沢小松園選
「あだ名」三句　黒川紫香選
「輝く」三句　吉田圭井堂選
席題　三題　当日発表
柳話　麻生路郎
表彰　昭和三十八年度不朽洞賞優勝者
一ヵ年間本社句会全出席者
短冊交換会　有志の方は各自一葉ご持参
呈賞　各題天他人・各題天位を路郎選により　天位に不朽洞賞
会費　百円
★投句だけの方は郵券三十円封入
（〆切は十一月五日）本社宛

2月本社句会予告
〃兼題〃
「冷静」
「介抱」
「日溜り」
「スリル」

**川雑支部句会**
—十二月

☆**富柳句会**・7日(土)一時、題、ハッタリ・温泉・プレゼント、所、富田林市立公民館。

☆**かがみ句会**　2日(月)夕、題、年内・終り・支払い・震え・広告、所、池田古心居。

☆**明和研究句会**　8日(日)一時、題、雪・焚火・貯める、所、阪神電車鳴尾駅東南二百米鳴尾公民館。

☆**玉造句会**　10日(火)五時半、題、鼻唄・忘れる・蕎麦、所、市電玉造電停南百米大阪信用金庫。

☆**京都句会**　16日(月)夕、題、清らか・旋風・岐路、所、未定。

☆**南海電鉄句会**　19日(木)六時、題、時差出勤・ごて得・一流、所、難波高架下親和クラブ。

☆**阿倍野句会**　20日(金)六時半、題、附録・好き・買物・弱気、所、阿倍野区松崎町三ノ一〇割煮大万。

麻生路郎著

# 好川柳鑑賞

好評噴々

川柳の味い方・五百数十句

（毎日新聞評）

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう六十年にもなる。

この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の雑誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁重な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとしたものである。

句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

価二五〇円
送費八〇円
B6版
二五〇余頁

発行所 川柳雑誌社
大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地
電話大阪（671）六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇



麻生路郎先生著

# 川柳とは何か

—川柳の作り方と味わい方—

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

価二五〇円
送費七〇円

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区払方町27　振替東京29507



# C·M·C児童音楽サークル

バイオリン・ピアノ・声楽・チエロ・特設バレエ科

千林教室
大阪市旭区北清水町九六　北清水集会所　バイオリン科

あびこ教室
大阪市住吉区南住吉四ノ一　あびこ幼稚園　バイオリン科　電(69)1874

西九条教室
大阪市西九条　防犯会館　バイオリン科　電(69)9836

生駒教室
奈良県生駒町北新町　文化会館　生駒2027

指導　麻生アート　外数氏

★サークルに関する御問い合せは左記へ御願いいたします
奈良県生駒町本町103　電話生駒（〇四三七）二〇二七
主宰　麻生アート



何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも心にくい贈物かと存じます

一〇〇円から一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都3店に共通です

大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四条
高島屋


## 募集

### 課題吟募集

痛手（十句以内）川村好郎選
孤独（十句以内）西森花村選
ライバル（十句以内）工藤甲吉選
金策（十句以内）尼崎之助選
風（十句以内）小西無鬼選
サンプル（十句以内）吉田圭井堂選
（一月十五日締切）

### 毎号募集

近作柳樽（雑詠十句以内）麻生路郎選
川柳塔（雑詠十句以内）北川春巣選
文章（評論・研究・感想其他）麻生路郎選
（毎月十五日締切）

### 投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
▼「課題吟」は誰でも投句が出来る。「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。


Printed in Japan

B列5号　毎月一回一日発行
川柳雑誌　三十八年　第十二号
定価　一二〇円（送料六円）
半カ年　七五六円（〒共）
一カ年　一、四四〇円（〒共）
（禁転載）
昭和三十八年十一月廿五日印刷
昭和三十八年十二月一日発行
編集兼発行人　麻生幸二郎
大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地
印刷人　大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地
発行所　川柳雑誌社
電話大阪（671）六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇番

国立公園 奥新和歌浦・雑賀崎

風光明媚な海岸美を誇る

国際観光旅館

うおまたろ

魚又楼

TEL 和歌山④ 0431・0387

貫禄は充分です

樽で貯蔵しはじめてから40年…

まろやかな味！

ふくよかな香り！

すべてが完璧なウイスキーです　サントリー

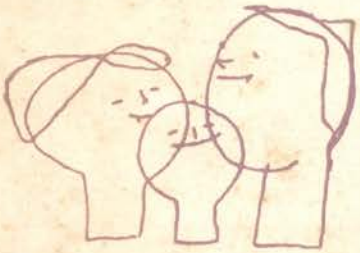
世界の名酒

サントリー

ローヤル三、〇〇〇円　オールド一、六〇〇円

角瓶一、三五〇円　白札七五〇円

一家そろつてホーライ党



廣東料理

蓬莱

大阪なんば・TEL (641) 551－2

水がアイロンかけをする

クラボウ

ベルファスト

セルフ・アイロン・コットン

技術提携先—米国ロ・ミリケン社

製造発売元—倉敷紡績株式会社

編集兼発行人　秋生孝二郎　発行所　川柳雑誌社　大阪市住吉区四万代西五丁目二三番地　電話大阪(871)六〇八一　郵口振替大阪七五〇五〇番　正価百二十円（送料六円）